810

教育文化研究会編

國語

中学校
第二学年用

三

教育図書株式会社

文部省検定済教科書

684 類
6 號

60357
教科書文庫
6
810
45-1949
0130F
49693

昭和二十四年十月十日
文部省檢定済
中学校國語科用

國語

中学校
第二学年用

三

教育図書株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449693

目次

一　雪うさぎ……竹内てるよ…一
二　冬の生活
　一、冬の山……槇有恒…三
　二、冬の動物……ソロー…七
三　学校図書館……深川恒喜…一九
四　短歌と俳句
　一、短歌について……窪田空穂…三〇
　二、俳句の世界……中村草田男…三五
五　地蔵の話……長與善郎…四〇
六　すずめ恩を報ずること……（宇治拾遺物語）…五三
七　ちどり……下村鍬史…五六
〔附〕現代かなづかいの要領

一　雪うさぎ

竹内てるよ

竹内てるよは、明治三十七年（一九〇四）北海道で生まれた。詩人。著書には、「静かなる愛」・「生命の歌」・「霜の來る朝」・「能のをみなたち」などがある。

粉雪はさら〳〵していてめが細かいので
なか〳〵　雪うさぎにならない
握っているなんてんの赤い実が
小さい手のあたゝかみでつぶれてしまっても
おばさんは　雪うさぎができない

ことしも　雪の降るころになった
目をつむってガラス戸にあたる
かすかな音をきいていると
ふるさとの子どもべや
古びた壁にはったお清書の

一　雪うさぎ

ラの字の少しまがったのまで思い出す

さら〳〵と
ガラス戸にあたる音をききあした　朝がきて少しつもっていたらあのひばがきの上の新しいので雪うさぎを作ってみようと思いながら
静かに
枕を右になおす

ひばがき　ひのきの葉を積み重ねて作ったかきね。

（「生命の歌」による）

【学習の手引】

(1)この詩の情景について話しあう。

(2)この詩の味わいがよく出るように、朗読のしかたをくふうする。

(3)次の問に答える。

イ、「雪うさぎ」というのはどんなものか。

ロ、どうして、「ふるさとの子どもべや」のことを思い出すのか。

ハ、「静かに枕を右になおす」というのはどんな意味か。

(4)冬の生活に取材して、たとえば「冬げしき」・「雪なげ」などの題で詩を作って発表しあう。

二　冬の生活

この課は、槇有恒の「冬の山」とソローの「冬の動物」との二つの文から成りたっている。この二つの文を読んで、いろ〳〵な冬の生活に楽しく触れてみよう。

一、冬の山

槇有恒

槇有恒は、明治二十七年（一八九四）宮城縣で生まれた。登山家。著書には「山行」がある。

大正九年一月十七日午前六時半、案内人を伴のうて宿を出る。寒天、星に満ち、南方にそびえる峨峨たるメッテンベルグと蒼白な氷のがけのフィッシャーヘルナーとの間にかまをといだようなありあけの月が輝き、そのそばに大きな星が曉のさめやらぬまたゝきを送っている。

寒い。骨の髄までもしみて痛む寒さだ。足下の雪がきしってかたくり粉を絞るような音がする。どこのホテルでもまだ寝ている。たゞ村の男がふたり三人、そりを引いて行き過ぎる。アルプへまぐさを取りに行くのか。鏡のような、人影のないスケートリンク、閉ざされた郵便局を過ぎて道がやゝ坂になってきた。雪自轉車に女の子がふたり乘って滑降して來る。「おはよう。」と呼びかけて行く子どもらは、ほおに紅さえさして元氣がよい。ランドセルを背負って通学するところである。夜が追われて足下の雪に青さがまさってゆく。星は消えて月は白紙のごとく輝きを失う。今しも冬ごもりの小屋

雪自轉車　自轉車の二輪の代わりにそりをつけたもの。前の輪でハンドルの用をする。

の中から出て來た牛どもが、道ばたの溪流を心ゆくまで飲んでいる。その首の鈴の音がりん〳〵と村の上に響きわたる。私たちは道が急傾斜なのでスキーを除き、くつのびょうを打ち込みながらひのきの森にはいった。鳥の声すらなく、たゞ枝から落ちる雪のかすかな私語のみである。日を迎えんとして森も衣を変えるのであろう。すると上の方から雪煙をあげて飛んで來る者がある。農夫が、短い材木を小山のごとくそりに積み、その前に立ってがんじょうな両足で雪をけり、かじをとって降りて來るのだ。そりの後方に更に鉄の鎖でひとかゝえもあるような木の根を引きずって行く。一台飛ぶように過ぎるとまた一台続く。腕も顔面も足もみな筋骨たくましく、ミケランジェロの彫刻に見る姿のようであった。

ミケランジェロ（一四七五―一五六四）イタリア文藝復興期最大の藝術家。画家。彫刻家。建築家。詩人。

やがて朝日は山の頂を上りきってすその谷にさし込む。わたしたちは谷を隔てて輝くユングフラウ・メンヒ・アイガー・フィンスタールホルン・シュレックホルン・ヴェッターホルンなどを仰いで、喜びの情が胸におどる。このような喜びの感は日常の生活からは得がたい。たゞ雪の山に登って白々と光る幾十里の険しい山波を見るときに、いつもわきあがる血潮の若やぎである。そしてこの喜びは身にまつわる苦悩と陰濕な感情とを吹きはらって、文字どおり天空快活の世界に新しく導く。けっして一時的の興奮ではない。生涯を通じて新しくすこやかによみがえる記憶である。

輝く峰々、かげる氷河、日に浮き出た断崖のひだ、頂から立ち上る雪煙、そしていっさいをおゝう深い碧空。私は見るともなく見ほれて、飽かぬながめにひたっていた。人声がする。村の男衆が五、六人連れだって、おの〳〵空そりをかついで登って來る。

森はきれてアルプに出た。きつねやうさぎの足跡が走っている。もう日はかん〳〵と照りだして背を暖める。私たちは小屋の縁に腰をおろして、魔法瓶から熱い茶を飲み、サンドウィッチを食う。くびすじのあたりが日に燒けてひり〳〵する。

小憩後スキーをうがって登る。雪面が風に吹かれてクラストを作っていて、行進が難儀になる。案内人がかもしかがいるというので、さされる方を見る。場所はシンメリホルンの断崖の下で、すくなくとも三百メートルは離れている。三頭あざやかに雪の上に現われた。初めの間は私たちを認めなかったらしいが、そのうちに一頭が岩上に立ってこっちをじっとながめた。全群も立ち止まってこっちを見た。その瞬時の後、彼らは雪をけって遠ざかって行く。この六頭のあとに更にまた五頭の一群が岩陰から走り出た。私はしば〳〵かもしかは見たが、これだけの大群に出会ったのははじめてであった。

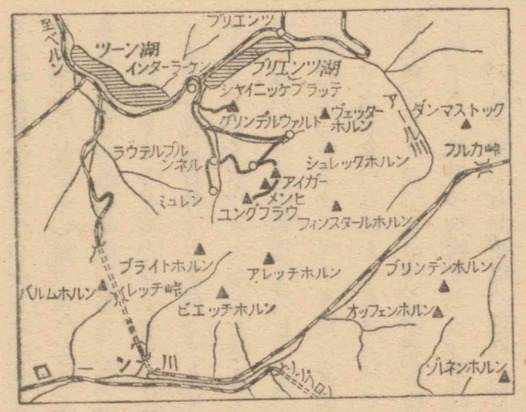
雪のみの世界に何を求めて彼らはあのように元氣な生活ができるのであろう。自然の力は無限だ。それは氣をつけて見る者にのみ開かれる驚異の世界である。ふたりは急な凍った傾斜に取り付いて、スキーをシュタイグアイゼンに代えて登った。ファウルホルンの頂のホテルの前に立ったのは眞晝の日盛りであったが、堅く閉ざされた戸のすみに寒風がいたずらに叫んでいる。

案内者は一枚戸を破ってはいった。室は戸のすきから吹き込む雪で埋まっている。小憩の後頂上に

クラスト　雪の堅くなった外皮。

かもしか　牛科の一種。しかよりやゝ小さい野獣。主として険しい山岳地帶に住む。

シュタイグアイゼン　ドイツ語。急傾斜を登るための鉄びょうを打ったくつ。



立つ。北面二千メートルのがけ下、ブリエンツ湖がさゞ波一つ寄せず紺青に凝っている。その東端のブリエンツの町は今しも日光を浴びて教会の尖塔が光る。湖の西岸にインターラーケンの町をはさんでツーン湖がひろ〳〵と展開する。案内者はベルンが見えると言う。まさしく市街の一群が見える。その中に國会議事堂の大きな建物だけが画然と認められる。透明な大氣だ。すくなくとも直径五十キロは隔たっているのだ。ユラのゆるい山波も雪をいただいている。その陰はフランスなのだ。また北東はるかに一群の山脈がある。シュヴァルツヴァルトだろうという。そこはドイツだ。それより近くはリギのピラミッド形やピラトスのとがった頂が雪もなく黒々とそびえる。東から北へ、北から西へかけては一帶に自分よりは低い。人住む里の優しいけしきである。しかし目をひとたび南に轉ずると、深いグリンデルヴァルトの谷を越えて、ベルナーオーバーランド群峰が重なりあって高くそびえている。

ユングフラウの端正な美しい姿、メンヒの円頭、アイガーの雪の少ない肩をいからしたような堅いがけ、フィンスターアールホルンの尖塔形の頂、シュレックホルンの豪壯な威容、その他の山々が群がって大殿堂の壯観をくりひろげる。あらゆる線がいり交っているのであるが、一線として不愉快な感を與えるものがない。その形容のかぎりを盡くした複雜さが溶けあって、一つの壯美となって精神を領する。無音の調律である。それは生命への調律である。

ながめは飽かぬが凍傷の恐れがあるので長く頂にたゝずむことを許されぬ。ホテルの前からスキーをはいて、直滑降する。たちまち鞍部に下り、東に轉じてバッハアルプゼーの湖上に出る。湖面は積雪幾尺の下に凍っていて、格好の滑走場となっている。上からの勢いは湖上を一過して更に下って行く。案内人はさすがにじょうずで、スラロームを自由に描いて雪を飛ばしながらゆう〳〵と私を待つ。

バッフィン湾　カナダとグリーンランドとの間にある内海。

あざらし　北海に住む肉食獣。体長一、二メートル、四足はひれ状をしている。

エスキモー　北極に住む未開民族。体格がひじょうに小さいので知られている。

じゃこうねずみ　はつかねずみに似た胴の長さ二センチほどの小獣。

未熟な私は、それでも轉倒する度数が少なくなったと、苦しい賞賛をあまんじなければならなかった。登りに六時間かゝった場所を二時間で下り、村に帰り着いた。

（「山行」による）

二、冬の動物

ソロー（Henry David Thoreau）は、一八一七年アメリカのコンコードに生まれ、一八六二年になくなった。詩人。社会評論家。著書には、「森林生活」・「田園の逍遙」・「メーンの森」などがある。

池がすっかり凍ってしまったときには、どこへでも行かれる。新しい道ができたばかりでなく、その周囲の、見慣れた風景から、更に新しい眺望が生まれた。フリントの池がすっかり雪をもっておゝわれたときには、――従來もとき〳〵舟をこぎまわったり、また、その上で氷すべりをしたことがあるが――意外にもあまりひろ〳〵としているうえ、ひじょうに目新しいために、どう見ても、バッフィン湾だとしか思われぬくらいだった。リンカーンの丘は、雪におゝわれた平原のかなたにそびえ、それは私が以前そこに立った丘だとはどうしても思われない。漁夫たちは、氷のかなたの、測量しきれないほど遠方で、静かに、おゝかみのような大きな犬を引きまわしているのが、あざらし取りか、エスキモー土人のようであり、また、霧の深いときは、作りもののように、もうろうとして見えた。そして、私には、彼らが巨人だか小人だかわからなかった。私が夕方リンカーンの村へ講演に行くときには、私の家と講堂との間には、道もなければ人家もないこの場所を通るのであった。私の通る途中の、グース池にはじゃこうねずみが住んでいて、彼らの小屋を、氷の上に高く築きあげていた。も

っとも私がそこを通るときは、一匹だって道ばたからは見えなかったけれど。ウォルデン池は、他の池と同様、ふつうは雪がないか、またはあっても少ししか積もらないので、私の庭園であった。それゆえ、雪が地上六、七十センチも深く、いたる所に積もって、村人らが引きこもっているときでも、私は自由に歩くことができたのである。それで村の街道から遠くの方で、ほとんど絶えまなく、そりの鈴がちりんちりんと鳴るのを聞きながら、私はそれに乗ったり氷すべりをしたりした。そこはちょうどきれいに踏みならされ、雪やつらゝのはけのために頭をたれた森や、荘厳なひのきの木でおゝわれた廣い牧場のようであった。

冬の夜のものおとについては、果てしれぬ遠くの方で、ふくろうの、哀調を帶び、しかも音律をもった鳴き声を聞いた。ふくろうはまた、晝間にも、とき〳〵鳴いた。凍った地上を、適当なばちででも打つような音であった。私は冬の夕方ふくろうが鳴きだすと、きっと戸をあけるのであった。それはほう、ほう、ほう、ふう、ふう、ふう、と朗らかに響く。初めの三声はときにはほう、だあ、どう——、と調子が高まって聞えたり、またときには、たゞ、ふう、ふう、とだけ聞えることもあった。

初冬のある夜、池がまだまったく凍りきらない九時ごろに、私はがちょうの高い鳴き声に驚かされた。そこで戸口まで出てみると、家の上を低く飛んでいる翼の音が、森の中のあらしのように聞えた。彼らは、私の家のともしびの光のために、屋根にとゞまる勇氣もないとみえて、池の上を越えてフェーヤ＝ヘヴンの方向へ飛び去った。そして、彼らの中の指揮官は、その間じゅう規則正しい調子で鳴いていた。するとだしぬけに、まぎれもなくねこふくろうが、私のすぐそばで、まだかつてこの森に住んでいる生きものから聞いたこともないような、しわがれた恐ろしい声で、一定の時間をおいてはがちょうに應答した。それは、さながらハドソン湾から飛んで來たこの侵入者たちに、生まれつきの大きな音声を示して、その面目を失わしめて、コンコードの眼界から彼らを追い出してしまうつもりらしかった。ふくろうよ、おまえは私にとっては、この神聖なる夜の今時分に私の本城を驚かせて、いったいどういうつもりなのだ。今ごろ私が、うたゝ寝でもしていると思っているのか。それともおまえは、私にはおまえのような肺臓も、のども持っていないと思っているのか。ぶう、ふう、ぶう、ぶう、ふう、それは私が今まで聞いた中での、最も身の毛のよだつような声だ。だが、おまえが、識別するだけの耳を持っているならば、いまだかつて見たことも聞いたこともないこの平野のような調和を理解できるはずだのに。

私はまた、池の氷がかさ〳〵と鳴る音を聞いた。それは、あたかもコンコード村　いる、私のなかまたちが、寝床の中で、休むことができず、疲れ果てて寝返りをうったり、腹が張って悪夢に悩まされたりしているようであった。また私は、霜に凍った地面の、くずれる音に目をさました。それはあたかも、馬車を引いて、私の家の戸口の方へ來るようであった。すると翌朝になって、長さ四分の一マイル、幅三分の一インチもある土のかたまりが見つかった。

とき〳〵私は、きつねの声を聞くことがあった。彼らは月夜に、雪の上を歩きまわりながら、しゃこやその他のえものを捜して、のら犬のように荒々しく、また悪魔のようにほえた。その声はあたかも、なにか、ある心配事に悩んでいるかのようであり、あるいは、なにか自分の思うことを言い表わそうとしているかのようでもあり、または、光明を得て、全然ふつうの犬になって、町を自由に走りたいともがいているかのようでもあった。なぜなれば、もしこゝに時代というものを考証してみる

ハドソン湾　北アメリカ州北部の大湾。

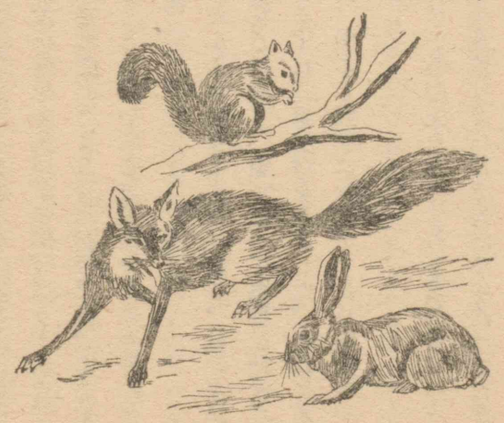
コンコード　アメリカのボストンの西北にある古都。エマーソン・ソローホーソンなどの文学者が住んだ所として名高い。

しゃこ　きじ科の小鳥。はとくらいの大きさ。主として東部アジアに野生する。

と、獣類社会にも、人間と同様の、文化が進みつゝある、と言えないこともないからである。あるときは、一匹のきつねが、私の家のともしびにひきつけられて、窓口まで來ては、ずるそうな悪口を、一声私に浴びせかけて退却するのであった。

夜明け方になると、屋根の上や、家のかなたこなたから、赤りすが悪口を言っては、私の目をさました。それは、さながら、そうするために、わざ〳〵使命を帶びて、森の中から派遣されて來るかのようであった。冬の間、私が未熟のさとうきびの穂を半ブッシェルほど家のそばの雪の上にまき、それにひき寄せられて來る種々の動物の、動作をながめて慰んだ。暮れ方や、夜には、きまって野うさぎが來て、それをたくさん食べた。また赤りすは、一日じゅう行ったり來たりし、その動作は、ひじょうに私を慰めた。あるものは、初めは用心しながら、小さなかしわの木の間を通って近寄って來て、風に散る木の葉のように、雪の上を、不規律に走り、今、右の方数歩の所で賭けものでもねらっているように、驚くほど、すみやかに、体力の疲れるのもしらずに、その敏捷な足でもって、想像もできぬほど早く走っていると思えば、はや次の瞬間には左方数歩の所に來ているのであった。しかし、一時に八フィート以上走ることは、けっしてなかった。すると、こんどは、急に休んでは、こっけいな表情や、無意味なとんぼ返りをする

ブッシェル　穀量の單位。一ブッシェルは約二斗一合。



ありさまは、さながら、宇宙にあるすべての目が彼を見物しているように思われる。私はりすが歩いているところを見たことはない。——それから彼は、またくまに、小松の枝に上がって、そのかんむり毛をまいては、だれひとり見ている者もないのに、仮定の見物人に向かって悪口をついたり、独白を述べたり、あるいはまた、宇宙のすべてのものを相手にして、物語をしているのである。——まったくこれは、どういう理由だか、私にはわからないが、おそらく、彼自身でも氣がつかないのであろう。とう〳〵彼はさとうきびのある所まで行って、適宜の穂を選び取り、例のごとく不安定な、三角形の道を走って、窓の前に積み上げたまきの頂上に上がり、そこから、眞向きに私をながめながら、いつまでともなくすわり、とき〳〵新しい穂を拾っては、まずばり〳〵とかじり始め、それから半分裸になった穂の軸をその辺にほおり捨てた。やがて、だん〳〵ぜいたくになって、そのえをもてあそび、穀粒の中みだけ味わっていながら、まきの上をさゝえていた片手で持っていたが、握り方が悪かったために、穂を地上に落した。そのとき、彼は、不安なこっけいな顔つきをして、穂が生きているのではないかしらと思って、それを見つめながら、心の中で、ふたゝびその穂を拾い上げようか、または新しいのを拾って來ようか、それともほかへ行こうか、と考えているらしかったが、しかし今、さとうきびのことを考えているかと思うと、もう耳を立ててあたりのようすをうかゞうのであった。かくして、この小さな、ぶしつけなりすは、午前中に、穂を幾つも幾つもむだにし、最後には、自分よりも、ずっと長くして、大きな穂を一本つかんで、たくみに平衡を保ちながら、水牛を運んで行くとらのように、自分の來た曲がった道を通り、とき〳〵休憩しては、やっとのことでそれを森の中へと持って帰った。穂があまり重いので、始終取り落しては垂直線と水平線の間の中線を作るそのよう

すは、ともかくも、どうしても持って帰ろうと決心しているもののようであった。――珍しくばかで妙なやつよ。――彼は、こうして、自分のすみかまで持って行っては離し、ときには、三十ロッドも四十ロッドも、または五十ロッドも遠方の松の木の頂上まで運んで行くことがある。私は、その後、森のいたる所に、穂の殻が散らばっているのを、よく見かけた。

とう〳〵かし鳥が來た。その調子はずれの鳴き声は、今よりも、ずっと以前から聞えていた。彼らは注意しながら、八分の一マイルぐらいの所まで近づいて來て、かさ〳〵と木から木に飛び移り、またおい〳〵と近寄って、りすの落した穀粒を拾い、それから松の枝に止まって、自分ののどには大きすぎる粒を、急いで飲もうとしては、のどをつまらせる。そしてひじょうに苦しんで、それを吐き出し、一時間もかゝって、いっしょうけんめいになって、くちばしで幾度も穀をつゝいた。彼らはまったく盗人だ。だから私は、彼らには、そんなに敬意を表しなかったのである。りすは、初めは臆病であるが、あたかも自分の所有分を持って行くようなつもりで、さとうきびを運び去った。

その間には、やまがらも群れをなして來て、りすの落した穀くずを拾い、眞近のこずえに飛んで行っては、それをつめの下に敷いて、小さなくちばしでこわし、殻の中の虫かと思って、のどに適するように、きれいに小さくした。やまがらは毎日來ては、私の家の前から、穀くずを拾っては、かすかな音をたて、畫めしを食った。その音は、草の中でつらゝの鳴る音のようであり、またいきおいのいいデイ、デイ、デイ、という音のようでもあり、またまれには、春の日など森の中から聞える針金のうなりのようでもあった。彼らは、ひじょうに私に慣れて、ついに、私がひとかゝえのまきを運び入れようとしているときに、そのまきの上に降りて來て、おくめんもなく止まり、まきをつゝくのであった。私がかつて、村の庭園で、雑草を拔いていたとき、一羽のすずめが肩に止まったことがあったが、そのときだけは、それは、私の付けた、いかなる肩章よりも、偉いものと思ったのであった。りすもまた、すっかり慣れると、ときには、近道をしようとて、私のくつの上に上がることもあった。

冬の終るころ、地面にはもはや、少しの雪もないときや、南側の小山やまきの上に積んだ雪の溶けかゝるときになると、しゃこが來てえをあさって行く。森の中の、どこを歩いてみても、しゃこが、驚いて羽ばたきをしながら、枯れ葉や高い木の枝から、雪を落しては逃げて行くのであった。それはちょうど黄金のちりのように日に光って降りて來るのであった。それは、この鳥は冬を恐れないからであった。ときゝ、水の流れにもぐり、またときには、柔らかい雪の中に、からだをつっ込んで、一日も二日も、そこにじっと隠れていることもあるそうだ。私は、彼らが日没ころ森から丘の所の野生のりんごの芽に來るのをよく驚かせたものである。彼らは毎夕、同じころに來ては、同じ木に止まるのである。猟師はそこで待ち伏せをしているのだ。森の近所の果樹園は、それがために、少なからず害を被った。とにかく私は、しゃこが食物を得てゆくことを喜ぶ者である。彼らは木の芽と水とで生きており、自然そのものの所有している鳥であるから。

まだ明けきらぬ冬の朝や、日の短い午後など、私は、一群の猟犬が生來の追撃性をおさえかねて、森の中を、かなたこなたと、縫うように走りまわって、ほえている声を聞いた。また猟師の角笛の音も、一定の間をおいては聞えた。それによって私は、犬の背後に人間のいることがわかった。森はふたゝび、鳴り響いたが、廣い池の面には、一匹のきつねも、それを追跡する犬の群れも出て來なかった。私は、夕方になって、そりの後に引きずった一匹のきつねのしっぽを、勝利の印として、宿を求

ロッド　一ロッドは五ヤード半。主としてアメリカで用いられる尺度。

かし鳥　別名かけす。はとよりやゝ小さい。他の鳥の鳴きまねがうまい。

やまがら　すずめ科の小鳥。大きさはすずめくらいで頭は黄赤色。りこうな性質を持ち飼い鳥として愛されている。

めながら帰って行く猟師たちに出会った。彼らが私に言うには、もしもきつねが、凍った土の底にじっとしていれば安全であり、またまっすぐに走りさえすれば、いかなる猟犬も追い着くことができぬものであると。しかしながら、あとに追手がいると、きつねは立ち止まっては休んで、彼らの近づくのを、耳を立てて窺っている。そして、一度走りだすと、彼は自分の古巣の周囲をぐる〳〵とまわって、猟師が待ち伏せている所へ出て來るのである、と。しかしながら、ときとしては、がけの上へ、数丈も高く走り上がって、向こう側へ飛び移ることがあるのをみると、彼は、水の上には、自分のにおいが移らないということを知っているらしいのであると。あるひとりの猟師は、かつて、一匹のきつねが犬に追われてウォルデン池の方へ逃げて行くのを見たことがあるそうだが、そのときは、ちょうど池の氷が、浅い水に囲まれていたものだから、きつねは途中まで行って、元の小山に帰って行った。それからまもなく猟犬が來たが彼はきつねのにおいをかぎ失ったのであったという。またあるときは、一群の猟犬だけが、猟をしに來て、私の家の戸口の所を通ったり、家の周囲をまわったりして、病氣にかゝったように傍若無人にほえていた。こうして彼らがかぎまわっているうちに、とう〳〵最も新しいきつねの足跡を見いだしたのである。それは、りこうな犬はそのためにはいかなる犠牲をも顧みないからである。ある日、ひとりの男が、レキシントンから、彼の猟犬を捜すために、私の小屋へたずねて來た。その犬というのは、大きな足跡を持っており、既に一週間も以前に、單独で猟に出かけたのだそうな。その男には、私の言うことが了解できなかったとみえて、私が、彼の質問に答えようとすると、彼はいつもそれをさえぎって、「あなたはまあ、いったいこんな所で何をしているのですか。」と尋ねるばかりだった。つまり彼は、犬を見失って、その代わりに人間を見いだしたのであった。

レキシントン　ボストン附近にある町の名。

ある年寄りの猟師があった。彼はきわめて無口な男で、毎年一度、水の暖かくなるころに、ウォルデン池へ水を浴びに來ては、じっと私をながめた。彼の話によれば、数年前のある日の午後、彼は銃をさげて、ウォルデンの森を歩きまわった。そして彼がウェイランドへの道を通るとき、猟犬の鳴き声の近づくのを聞いた。するとまもなく、一匹のきつねが、さくから道に飛び降りて、みる〳〵うちに、その道から、他のさくへ飛び上がった。それがために、彼が大急ぎで放った彈丸は、きつねに命中しなかったのである。すると少し隔たった後の方から、一匹の老犬が、三匹の子犬を連れて、彼ら自身のえものとして、いっしょうけんめいに追跡して來たが、やがてふたゝび森の中にはいってしまった。その日の午後おそく、彼は、ウォルデン池の南岸の、深く茂った森の中で休息しているとき、遠くフェーヤ＝ヘヴンの方にあたって、犬がなおきつねを追跡している鳴き声を聞いた。そして彼らが近づくにしたがって、鳴き声は、森に響きわたって、しだいしだいに近くなり、あるいはウェル牧場の方から、またはベーカ農場の方から聞えるのであった。彼は長い間、じっと立って、その声を聞いていた。それは猟師の耳には実にこゝちのいい響であったから。するととつぜん、きつねが現われて、荘厳な樹の間を、やす〳〵と、もの慣れた足どりでくぐり抜けて行った。彼は追手を背後に置き去りにして、すみやかにしかも静かに地べたに密着して走り去った。それから彼は森の中の岩の上に飛び上がって、まっすぐに立ち上がり、猟師に背を向けて聞き耳を立てた。その瞬間、猟師の腕は、あわれみの情に捕らわれた。だがそれは、ほんのちょっとの間であった。彼はねらいを定めたその瞬間、ズドン、という一発とともに、きつねは岩からころがり落ちていた。猟師はなおそこにじっとし

て、犬の声に耳を傾けていた。彼らは、やはりなおも追って來たのだ。そして今や、その恐ろしい叫び声は、木々の間を通して、近くの森に響きわたった。ついに、老犬が眼前に現われ、その鼻を地につけて、なにものかに取りつかれたもののように、空中をかんでは、まっすぐに岩の方へ疾走した。しかしながら、彼はそこに死んでいるきつねを見て、急にその追撃をやめ、驚きにうたれたように、默ってきつねの周囲をぐる〳〵と歩きまわった。

その夕方ウェストンの一紳士がコンコードの猟師のもとへ、彼の犬をたずねて來たのである。その紳士の話によると、この一週間、犬どもは、かってにウェストンの森から、猟に出て行ったのだったという。コンコードの猟師は、自分の知っている事柄を彼に告げ、またきつねの皮を彼に與えたが、彼は固辭して去った。その晩には犬どもが見つからなかったが、犬どもが、川を渡って、その晩はある農家に宿り、ごちそうになって、朝早く出発したということを、その翌日彼は聞いたのであった。

眞夜中に月の出ているとき、私はとき〳〵森の中を歩きまわっている猟犬に出会ったことがある。彼らは恐れているかのように、私の通って行く道から、隱れて、私が通り過ぎてしまうまで草むらの中にじっとたゝずんでいた。

りすと山ねずみとが、私の貯藏しているくるみを爭った。私の家の周囲には、直径一インチから四インチぐらいの黑松がたくさんはえていたが、去年の冬、はつかねずみのためにかじられてしまった。――こゝは彼らにとっては、ノルウェー式の冬で、雪は久しい間、深く積もっていた。それで彼らは、彼らの常食の中に木の皮もだいぶ混ぜなければならなかったのだ。それらの木は、幹を輪狀にかじられながらも、盛夏のころにもなお生きていて、一見したところ、青々と茂っており、あるものは一フィートぐらい生長するが、冬を越すと殘らず枯れてしまうのである。このようにして、一匹のはつかねずみのために、黑松一本全部が食事に供せられることは、明らかな事実である。しかしながら、この木は、ひじょうに密生する傾向があるから、それを間引くのも必要だとみえる。

野うさぎはきわめて慣れやすい。ある一匹は、冬じゅう私の家の下に、たゞ床板一枚を隔てて、隱れており、毎朝、私が身を動かしだすと、急いで飛んで來ては、私を驚かせた。そしてあまりあわてて、こつんこつんと自分の頭を床はりに打ちつけた。彼らは常に、夕暮れになると戸口のあたりに來て、私が捨てておいたばれいしょのくずをかじっているが、地面の色とあまり変わらないので、じっとしていると区別がつかない。またときとしては、月夜などに、その一匹が、じっと窓の下にすわっているのを隱見した。夕方、戸をあけると、彼らはいつでも、キイ〳〵と鳴きながら、飛びはねて逃げて行った。すぐに手もとまで來たときは、彼らは、私に可憐の情を起させた。ある夕方、入口の所に、私から二、三歩離れて、一匹すわっていたが、初めのうちは恐れおのゝいて、動こうともしなかった。この可憐な小さなやつは――やせて、骨ばかりで、耳はとがっていて、鼻は突き出ていて、尾は短くて、手が柔らかであった。その姿を見ていると、大自然はこれより以上の高尚な生物を産することができずに、たゞ疲れきって、倒れかゝっているようであった。その大きな目は、若々しく、弱々しく、ほとんど水ばれがしているようであった。私が一歩近づくと、びっくりして、からだと四足とをまっすぐにして、柔らかい彈性をもって雪の上を、はね返るように森のかなたへ逃げた。宇宙の勇氣と権威とを実証するこの野獸が、かく弱々しいのにも、理由がないではない。すなわち、それは彼の性質なのだ。

うさぎやしゃこのいない國には、いったいなんの價値があろうか。彼らは、最も質朴な土着的生物だ。そして昔も今も知られて、古い、とうとい種属だ。その色彩は、宇宙の実体そのものの色で、木の葉や土に、最もよく似ている。うさぎとしゃことはよく似ていて、たゞ一方が翼を持っているか、足を持っているかの相違である。うさぎやしゃこがふいに逃げるときには、ほとんど動物を見るようには思えない。それはたゞ自然的で、木の葉がさっと音をたてるのと同様である。將來いかなる革命が起ろうとも、しゃことうさぎとは、土着の人間と同じく、かならず永久に繁栄するであろう。森林が伐採されても、そのあとに芽を出すたけの低い林は、彼らの隠れ家となって、彼らはます〳〵繁殖するであろう。一匹の野うさぎもいない國土は、眞に哀れな國土である。わがニューイングランドの森林には、この両者がいくらでもおり、小枝の茂るかきねや、牧童が見張り番をしている馬の毛のわなに悩まされながら、いたる所の沼地の周囲に見られるのである。

（「森の生活」今井規清の訳による）

ニューイングランド　アメリカ合衆國の東北六州をさす。

【学習の手引】

(1)「冬の山」を読み、作者の行動を、地図によってたどってみる。

(2)この文の読後感を話しあう。

(3)めい〳〵の山の経験や山の想像を話しあってみる。

(4)次の問に答える。

イ、「いつもわきあがる血潮の若やぎである。」というのはどういう意味か。

ロ、「文字どおり天空快活の世界に導く。」というのはどういう意味か。

ハ、「その形容のかぎりを盡くした複雑さが溶けあって、一つの壯美となって精神を領する。」というのはどういう意味か。

(5)「冬の動物」を読んで、この長文のすじを短いことばで言ってみる。

(6)この文の読後感を話しあう。

(7)この文に出てくる動物を書き出してみる。

(8)二つの文を比べてみて、冬の生活の味わいについて感じたことを話しあう。

(9)「冬の樂しみ」という題で、自分の冬の生活を書いてみる。

三　学校図書館

深川恒喜

深川恒喜は、明治四十四年（一九一一）大阪で生まれた。宗教哲学者。文部事務官。

春雄君

お手紙ありがとう。きみが図書部員に選ばれたことは、図書部長をしている私にとっては、ほんとうにうれしいことです。しっかりやってください。おじい様の容態がよくなられたのはなによりでした。おとうさんやおかあさんもどんなに喜んでおられることでしょう。ちょうど三日前、おみまいのしるしに、肩の凝らない読みものを二冊送りましたが、きみが読んであげてください。

私の中学校はやっと新校舎ができあがり、今まで間借りしていた小学校から移ったところです。

新校舎といっても、そまつな建物で、教室の数もぎり〳〵いっぱい。図書館の必要性を大いに力説して、医務室と仕切りにした半教室を図書室にあてることになりました。私が図書部長をやってからちょうど二年めにとにかく独立の図書室ができたわけです。生徒の中にも熱心な図書部員がいて「自分たちの図書室は自分たちの手で」というモットーを作って、本を集めることや、整理や配架や室の飾りつけなどに夢中になっています。先週の土曜に、P・T・Aの主催で開館式をやりました。

現在藏書は二百五十冊、とても全生徒の要求を満たすことはできないので、自治会が目下図書増加の具体案を練っているところです。

さて、きみが図書委員としてやっていくため、いろ〳〵尋ねてこられた事柄に、いち〳〵答を書けば、けっこう一冊の本になってしまうことでしょう。この手紙でその全部にお答えすることはとてもできません。そこで、きょうは、図書委員として、心得ておかなければならない総論的なことと、さしあたって必要な、図書室の設備と図書館の利用とについて少し書きましょう。きみが疑問にしているその他のことは、うちの千代子から別にお返事することにしました。

千代子も高等学校二年で、ことしから図書委員に選ばれましたが、親子で、学校図書館のことをやっているわけです。千代子の学校の図書館は、高等学校だけに、図書館経営についての専門書も数冊あるそうで、それらを参考にして返事を書いてあげると千代子は言っています。それから、読書会のことですが、千代子も今ちょうど読書会をやっているところです。世界の代表的な婦人に関する作品の輪読会をすることになって、千代子は、キューリー夫人傳を担当することになり、今いっしょうけんめいに読んでいます。きみの場合でも、たとえば漱石の「ぼっちゃん」や、「わが輩はねこである」

配架　書だなに本を並べること。

P・T・A　Parents and Teachers Association の略で父母と教師の会。

キューリー夫人（一八六七―一九三四）　フランスの科学者。ラジウム発見者として知られている

漱石　夏目漱石（一八六七―一九一六）小説家。

などについて全学年の有志が集まって読書研究会をするのもよいし、「民主主義のために戦った人々」というような主題で、めい〳〵が、別々な本を読んでその結果を発表しあうのもよいと思います。ひとつ大いにやってごらんなさい。

ところで、総論的なことですが、この間の開館式のときに、私が図書館の意義について生徒やP・T・Aの会員にお話をした原稿がありますので、その一部を次に抜き書きします。きみが図書館について基礎的な理解を得るうえの助けとなると思います。

人間が長い歴史をとおして、また、廣い地域にわたって築いてきた文化は、どのくらいの量に達するであろうか。われ〳〵は、それをどうして学び、また知ることができるであろうか。

教科書には厳選された古今東西の代表的作品が載せられているが、教科書に載せられているものは、多くのすぐれた作品の一部分である場合が多いし、また教科書に載っている筆者には、更に他にもすぐれた作品がある場合も少なくない。ことに現行の教科書は、用紙が、ひじょうに制限をうけている関係から、薄くてとうてい内外古今の名作をみな載せることはできない。教科書に載っていない作者や作品にもすぐれたものが数多くある。

以前の教育は、その教育の目的においても、教科のたて方においても、また指導法の実際においても、画一的であったが、新しい教育は、各人の個性を伸ばすことに大きい力点をおいている。学級には、特にすゝんだ人、特に遅れている人、特殊な興味をもち、あるいは専門的な研究をやっている人などいろ〳〵あるが、そういう人々の多方面の興味や要求を満たすことは、とうてい現在の

教科書ではできない。また、たとえ、教科書が相当の分量を盛ることができるようになったとしても、一つの教科書が、何十人、何百人、否、無数の人々の興味や希望に合致することは不可能なことである。そこで、個性を育てようとするほんとうの教育の目的にかなった学習が行われるためには、どうしても教科書以外に多くの図書を用いなければならなくなるが、では、いったい、これらの材料を、学校ではどうして集め、また、学習のうえに、どういうふうに使うようにするのがよいか。

以前の教育はまた教科書中心主義といわれる。その教育が、生徒の多くの個性の要求に應じうるものでないことは今述べたとおりであるが、この教育については、更に、この教育を受けた人々が、社会に出て自分の受けた教育がどれだけ生涯の発展に役だったかを考えてみるとき、そこからいろ／＼の反省が出てくる。社会人として、活動するためには、いろ／＼のものを読まなければならない。新聞・雑誌・書籍。その書籍も、娯樂的なものもあれば、教養向きのもの、更に専門の学術書もある。その形態も内容も千差万別である。これらの資料を生活のそれ〴〵の場面、それ〴〵の必要に應じて、最も有効に使いこなしてゆく技術や能力、またある主題について調べる必要の起きたときにすぐその資料のある場所の見当がついて、容易に自分の目的を果たしうるような知識や理解、人間の一生をとおして発展しうるよい読書の趣味や習慣、こうしたことが、人間が眞に文化的な社会生活を営んでゆくにはぜひ必要である。教科書中心の教育を受けた今日のおとなの社会生活やその文化の姿を反省してみると、こうした諸点が、大きい欠陥として考えつくのである。そして、このような欠陥が、日常の社会生活における文化的水準の向上を長い間はゞみ続けていた大きい理由と考えられるのである。

日本人の教育に対する見方に、「教育は学校で受けるもので、学校を卒業すれば、教育は終る。」という考え方が、きわめて根強くゆきわたっている。しかし、人間は一生をとおして教養を高めてゆくべきもので、学校を卒業した後は、自分で自分を教育し、不断に向上に努めてゆかなければならないのである。それには、先に述べたようないろ／＼の知識や技能や態度を身につけることが、なんとしても必要であるが、しかしながら、このような訓練は、教科書一本の学習からはけっして得られるものではない。教科書以外のいろ／＼の図書を自ら取り扱い、その中に身を置いて、はじめて、そういうことが身につくのである。また、読書の習慣や趣味のようなものは、幼い時分からしっかり身につけないと、いったん悪い癖がつくと、いつ／＼までも、そのために苦しみ、その人の読書生活は一生貧弱なまゝでいることになる。

こういうふうに考えてくると、新しい教育の精神を実現するためには、教科書以外に多くの本が必要であることが、よくわかると思う。しかも、右にあげたような目的を達するためには、学校の中に豊富に図書が備えられて、それらの利用法についての指導や訓練が、学校で行われる必要のあることもおのずから理解せられるであろう。

のみならず、学校に図書の豊富な備えができ、図書室や図書館が整備せられてくると、学習上の便宜があるばかりでなく、公共のものをたいせつにすること、他人の迷惑にならないように注意することなどの公民的訓練もでき、また、生徒の図書部員の活動をとおして、生徒全体に自治的かつ民主的な生活態度の訓練もできる。

いろ〳〵の本を手に入れる、というだけならば、お金があれば個人で買って勉強してもよいわけである。しかし、今日の日本の國情を考えると、出版用紙の量はひじょうに少ない。そこで、今日の日本では、お互が少ない本を独占しないで、できるだけ多くの人々が利用しうるように、めいめいが心がけることが、特に必要なのではなかろうか。こういう心持が文化的な國家を建設していこうという精神にほかならない。

学校生活に学校図書館が必要なように、社会全体としては、社会人に対する教育機関として、また社会人自らの立場からは自己教育の機関として、公共図書館が必要である。日本では、公共図書館が全体的にみてひじょうに貧弱である。(春雄君の村には図書館がありますか。日本で公共図書館が発達していない理由はなぜか、私が前に書いたことを思いあわせて考えてみたまえ。)が、國立國会図書館ができて、これに伴なって日本の公共図書館も本格的な発達の軌道を進みつゝある。

このようにして学校生活においては学校図書館があらゆる学習活動のために役だち、社会生活においては公共図書館があらゆる人々の文化的な活動の一つの中心となることが必要である。

こういう姿こそ、文化國家の姿でなければならない。図書館は人類文化の凝結であり、宝庫であるが、図書館によって、われ〳〵は人類のばくだいな文化遺産を、しかも最も便宜な方法によって学び知ることができる。否、それは、單に学び知るだけでなく、図書館の活用そのものが、先に述べたように教育的にきわめて重要な意義をもっているのである。

まあ、ざっとこういうような内容のことを話しました。もちろん、右に述べた図書館の望ましいあり方に対比すると、図書館、ことに、今の学校の図書館は、どこの学校を見ても、むしろ欠点だらけといった方が実情にあっているかもしれません。きみの学校はどうですか。どこの学校でも図書館を整備するには、たくさんの問題をもっていると思いますが、私が今いちばん痛切に感じていることは、すくなくとも、これからの学校図書館は、(1)開架式を採用すること。(2)開校時中はいつでも利用することができるようにすること。(3)書籍だけでなく、雑誌・新聞・パンフレット類・地図・幻燈・紙芝居・フィルム、更に生徒の作品なども備えること。この三点はどうしても実行する必要があると思います。本がなくなるのをどうして防いだらよいか、というきみのお尋ねがありましたが、開架式にすると、いっそう紛失率が高くなるおそれもあります。それには、本そのものに、学校の藏書であることを明らかにする印をじゅうぶんに押したり、――隠し印というのを知っていますか。小さい藏書印を作って本の十一ページ、二十一ページ、三十一ページなど、一定のページのとじめのところに押しておくのです。――開館中は、図書部員が交替で監視したりすることもよいでしょう。紛失のような事故があったら自治会に持ちだして、じゅうぶん討議して、みんなの図書室だから、みんなが協力してよくする、という氣持を全校生が強くもってくるように、うまずたゆまず推進することが、根本だと思います。私の学校でも、紛失にはいちばん悩まされていますが、それかといってせっかく断行した開架式をやめたのでは多数の生徒の勉強にひじょうに不便になるので、私は部員たちとも話しあって、今言ったような氣風を校内にしぜんに興すように、苦心しているところです。

開架式
書だなから好きな本を自由に出し入れできるやり方。

だいぶ長くなりましたが、次に、図書館の利用法のことをちょっと述べておきましょう。

お手紙によると、きみは、学級文庫も作っておられるようですが、みながいちばん利用しよい学級

文庫にも、一定の利用のきまりがあるでしょう。そうでないと、本がひじょうにいたんだり、紛失したり、あるいはある人が何冊もの本を長期間独占したりすることが起らないとはかぎりません。きみの学校の図書室はどうなっていますか。なにか利用の規定のようなものができていますか。図書部の委員は、いつも、利用する人の便宜を第一に念頭におかなくてはなりません。それには、できるだけ簡明な規定を作ることです。利用規定には、(1)本を借りる手続き、(2)本の分類と排列のしかた、(3)目録やカードの説明とその排列の順序、(4)本の捜し方、カードの繰り方、(5)開室時間や閉室の定め、などを盛りこみます。私の学校の学校新聞では、図書館特集号を近く出しますが、それに、私の学校の図書館の利用規定や利用の案内などを載せるはずになっています。出たら送りましょう。参考になると思います。

きみの学校図書室には、まだカードはないようですが、本がふえてきたらどうしても入用になりましょう。カードや図書箋の入手については縣立の図書館へ照会してごらんなさい。そして現在、たとえ本が少なくてもカードも作って、その引き方に慣れておくことが、將來のために役だつことと思います。

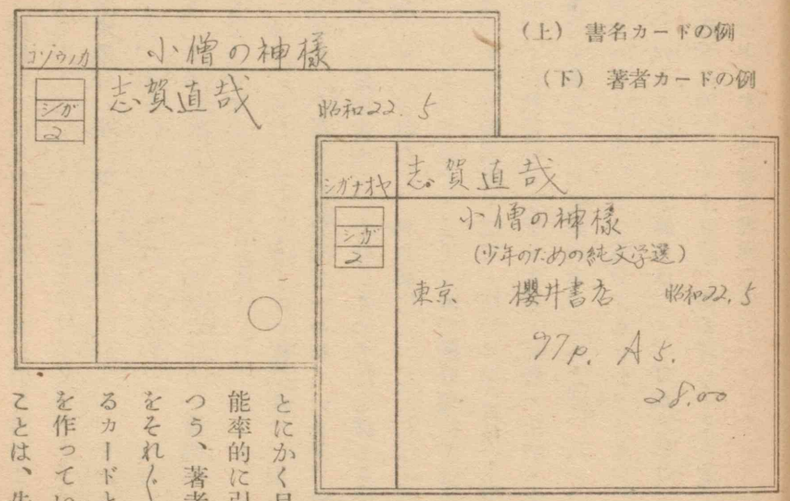
きみは町の図書館へ先生と見学に行ったよしですが、その印象をもっと詳しく書き送ってください。他の図書委員の感想はどうでしたか、それも次のたよりで知らせてください。

社会科が始まって、中学生や高校生がさかんに公共図書館へ行くようになりましたが、本の捜し方を知らないために、ずいぶんむだな労力を費やしているようです。それに、図書館内での公民的な心得が足りないために、人のじゃまをしたり、本をよごしたり、いためたりする者があるうえに、切り取りなどやる者まで出てきて、ほんとに残念なことです。

図書館の利用法というのは、たゞ本を見つけて読むというだけでなしに、本をたいせつにし、また人に迷惑をかけないようにといった図書館道徳をも含めて考えなければならないと思います。

まず図書館にはいったら、その図書館の利用規定をしっかり読むことです。そうでないと、箱の中のねずみのように、あっちをつゝきこっちをつゝき、うろうろばかりしていて、かんじんの本が見つからないようなことになります。冊子式でもあるいはカード式でもとにかく目録がどういう構成になっているかを早く知り、これを能率的に引いて、目的の本を捜し出します。カード式目録は、ふつう、著者名・書名・件名などから引けるように記入したカードをそれ〴〵五十音順とかＡＢＣ順に並べてあります。著者で引けるカードと、件名で引けるカードなどを混合した辞書体式の目録を作っているところもあります。接架式のときでも目録の必要なことは、先に言ったとおりです。

冊子式
一冊の本のように図書目録の形式。



(上)　書名カードの例
(下)　著者カードの例

接架式では自由に書架から本を引き出せますが、その反面、取り出した本を元の場所へ返すことをまちがえないように、氣をつける必要があります。接架式でも開架式でも、カードで本を見つけたら、請求番号の順に從って書架をさがすか、または、閲覧票の所定の欄に書いて出納所にさし出すわけですが、本を借りたときは、きみのノートの方にも、書名と著者名と図書番号とをひかえておくことです。こうしておくと、この次にもう一度調べようとするときに、またカードを繰ったりする時間を省くことができます。

本の分類はなか〳〵やっかいな問題で、現在ではまだ図書館によってまち〳〵ですが、「日本十進分類法」が最もよい分類といわれています。國立國会図書館もこれを採用していますし、公共図書館や、学校図書館も、今後はこの方法を採るものがだん〳〵ふえていく方向にあります。図書館の分類法が統一されたら、利用者にとってどれほどの便宜になるかわかりません。

アメリカでは、デューイの十進分類法でほとんど統一されているということです。日本十進分類法は、すべての図書を総記・精神科学（哲学・宗教）・歴史科学（歴史・地誌）・社会科学（政治・経済・教育）・自然科学・工学・産業・藝術・語学・文学の十の部門に分けて、この各部門に〇から九までの番号を與え、次に各部門を、たとえば、八一、八二というように更に十区分し、こうしてできた百項目をそれ〳〵更に十に細分するというように、十々と重ねて分類を進めていく方法です。これによると、たとえば、日本歴史は二一、日本地理は二九一、教育は三七、義務教育は三七三、数学は四一、物理学は四二となります。その詳しいことは、「日本十進分類法」を見なければなりませんが、文部省で出した「学校図書館の手引」にはたいていのことが載っています。学校にありますから、先生にお借りしてみてごらんなさい。

デューイ（一八五一―九三）アメリカの図書館学者。

だいぶ長くなりました。書きたいことはまだ〳〵いくらもありますが、きょうはこれくらいにします。わからないことはどん〳〵お手紙で尋ねておいでなさい。私か千代子かでお返事します。そして図書室をりっぱに作りあげていってください。

おとうさんやおかあさんによろしく。

月　日　　松野義郎

【学習の手引】

(1)この手紙を書いた人（松野義郎）は何をしている人か、この手紙を受け取った春雄君は何をしている人かを調べて、話しあう。

(2)春雄君は、この手紙を書いた人に、どんなことを質問したのか、そして、その答はどうなっているかを調べて、箇條書にする。

(3)P・T・Aの会員に対しての話の原稿の中に書かれてあることはどんなことか、短くまとめて言ってみる。

(4)これからの学校図書館は、どのようになったらよいかを話しあう。

(5)図書館の利用法について調べ、だいじな点を箇條書にしてみる。

(6)学級文庫についてみんなでいろ〳〵くふうする。

(7)できれば、図書館に行って、じっさいに本を借りて読む。

(8)学校図書館や学級文庫の建設や利用のしかたについての質問や希望を手紙の形で書き、友だちと交換して返事を書く。

四　短歌と俳句

一、短歌について

窪田空穂

窪田空穂、本名は通治。明治十年（一八七七）長野縣で生まれた。歌人。國文学者。藝術院会員。著書には、歌集に「まひる野」・「濁れる川」・「土を眺めて」・「郷愁」・「茜雲」など、小説に「炉辺」・「旅人」、随筆に「短歌隨見」・「忘れぬうちに」・「明日の短歌」、研究に「万葉集評釈」・「平安朝文藝の精神」・「古今和歌集評釈」などがある。

諸君の中には、他人の作った短歌は多少読んでいて、おもしろいと感じてもいるが、自分ではまだ作ったことがない、ときとして自分も作ってみたいという氣は起るが、短歌というものが特別なものに思え、ようすがわからないところから、安心して手が出せないという氣がして、ない〳〵当惑を感じている人があろう。またそれより一歩すゝんで、少しは作ってみたが、これでいいものかいけないものか、はっきりわからないで、同じく当惑の感を持っている人もあろう。

そうした諸君の中の、まだ作ったことのない人には、私は確信をもって言う。短歌というものはだれにでも作れるものだ。作ろうと思って少しくふうすれば、短歌のうえの学問などはなくても、けっこう作れるものだ。安心して、勇氣を出して、とっととお作りなさいと。

さしえ　鉦ならし信濃の國をゆき行かばありしながらの母見るらむか　空穂

短歌というものはどういうものかを理解するには、短歌の特色はどこにあるかということを理解するのが、第一に必要なことである。

われ〳〵の氣分の中の大部分を占めている、日常生活のうえにいやおうなしに起るところの氣分、そして本能的に言い表わしてみたいもので、それができたらば大きな慰めになるだろうと思われるところの氣分、そうした氣分が、ふしぎにも短歌にかっこうした、てごろな内容となるのである。言い換えると、そうした内容を言い表わすには短歌という形式は、他のなにものにもまさった形式なのである。更にまた、そうした氣分は、内容が氣分であって事件でないために、調子の多い、また高いことばでないと言い表わせないものである。これはよしあしの論ではなくて、事実として、それでないとできないのである。この調子のあることばという点から、短歌の形式は、形式そのものが既に調子であって、それをするにきわめて適当した形式で、その点は、いわゆる試験済みとなっているものなのである。

短歌の特色は、第一は内容にあるが、第二は形式にあって、そのいずれが重いかというと、第二の形式の方が、第一の内容よりは重いのである。

短歌には改めていうまでもなく、一定の形式がある。古くから三十一文字とよんでいる三十一音が

それで、更にいえば五・七・五・七・七音の組み合わせで、意味からいえば、これだけで一つのまとまった心持を表わしているものである。

作歌の第一の要領は、心持と形式とを過不及なきものにすることで、本來は過不及のあるもので、それがふつうであって、過不及を切り縮めるところに惱みとともに喜びのあるものだということを、よく〳〵腹に入れるべきである。

次に作歌のうえで注意すべき問題は、歌の調べということである。

古來「歌は調べなり」といっている。これは調べというものが歌の全部で、これさえのみこめれば歌というものがのみこめ、そして歌をのみこめれば、じょうずによめるという意味でいっているのである。

調べというものは、ことばの持っている調子である。短歌に限ったわけではなく、散文のうえでも調子のあることばはすなわち、調べを持っているといえるのである。これを短歌に限ったものとしていっているのは、短歌は調べを主としたもの、むしろ生命としたもので、散文における事件というもののない代わりに、散文にはない、あっても多くは重んじていない調べがあって、そしてそれだけを特色としているからである。「歌は調べなり」ということは、短歌の短歌たる特色を、最も簡單に說明しえたことばなのである。

短歌の一首は、三十一音という短いものであるが、その内容からいうと文章の一編と同じことであって、一つのまとまった思想を持ったものでなくてはならない。これは改めていうまでもない明らかなことなのである。この制限された短い中で、一つのまとまった思想を言おうとすると、そこにいろいろの問題が起ってくる。

文章は複雜したことを扱い、短歌はちょっとしたことを扱うというこの解釈は誤ったものである。短歌の扱うものは、ことではなく、すなわち氣分なのである。氣分は、これを輪郭的にいえば短いことばで言えるものである。たとえば、うれしいと言い、悲しいと言っただけでもおゝよそはわかるほどのものである。しかしこの氣分は、その本性は複雜したものである。うれしいということばは同じであるが、そのうれしさは同じ人でも年齢によって内容が違い、また場合によっても内容が違って、その違い方は千差万別である。

短歌のうえでは、だいたいとしては、ヨーロッパふうのこと細かい言い方はできないのである。いかにちょっとした氣分であっても、一つの氣分を引き起させた事実は、注意してみるとかなりなまで複雜したものであるのがふつうである。その全部を言うということは、形式に制限のない散文であってはじめてできることで、三十一音という定まった形式を持った短歌にあっては絶対にできないことなのである。しかし前にもいうように、氣分をわかるものに、すくなくとも誤解の起らないものにするにはこと細かに言わなくてはならないのである。このことは明らかに矛盾したものである。こと細かに言わなければならないが、形式はそれをすることを許さない。しかし許さなくてもなんらかの方法でそれはしなければならないのである。これはどうすべきであろう。

その方法はたゞ一つあって、またそれしかない。それは本來複雜な事柄を、中心をとらえることに

よって單純にするという方法である。

これは容易なことではなく、むしろ困難なことであるが、しかし一定の形式をもった短歌を作ろうとする以上は、どうでも堪えなければならないところの困難である。そしてこの困難は、こととしては困難であるが、それをしおえればひじょうに快いもので、他面からいうと、作歌の魅力の大半を占めているものなのである。

これは今に始まったことではなく、古來作歌をした人の全部の經驗していることである。古くはこのことを、この歌には余情があるといい、またないともいって、余情のあるなしをもって短歌の優劣を定めているのである。その余情とは何かというと、一首の歌が風景の美しさを写したものであるとすると、写してあるところは一つの風景の一部分であって、たとえば額縁の中に收まっているだけの小さいものであるから、それを見ていると必然的にその風景のひろがりの、描いてはない部分が想像されてくるのと同様に、短歌のうえでもそうした氣分を起させてくる。それを余情といっているのである。他人の歌を読んでみてその言ってあることがそれだけに盡きず、そう言っている人の、そのときの狀態までも思われてき、更にすゝんでは、そういうことが自身の中にもあったと思い起してくるのなども、これを余情という中に入れられるものである。

この余情は、一首の歌にできあがったものについて言うことばである。これを一首の歌をできあがらせる前、すなわち作歌の用意をいううえから言うと、事柄は同じであるが違ったことばで言う方がわかりよくなる。それは複雜の單純化ということばである。一つの氣分を起させた事柄を、よく〳〵注意してみて、その中心となる点、重大な点だけをとらえて他は潔く捨ててしまうことである。ところが実は捨てられるものではなく、その中心にからんで、捨ててもまつわり付いているものである。言い換えると、中心だけをしっかりとらえると、わからせなければならないことだけがはっきりわかって、それほどではない、どうでもいい部分は隠れたかたちになるのである。更にいえば、短いことばで要領よく全部を傳えることになるのである。この用意がすなわち複雜の單純化なのである。

三十一音という標準にしっくりあてはまるところの單純化、また單純にして複雜に劣らないだけのきわめて力強い、特殊なものとする方法、これはすべて古來の歌人の問題としたところのもので、そして解決をしているところのものである。それはどういう方法かというと、一に短歌の調べによることである。調べというものは、これらのことを解決する唯一の方法なのである。

（「短歌作法入門」による）

二、俳句の世界

中村草田男

中村草田男、本名は清一郎。明治三十四年（一九〇一）中華民國のアモイで生まれた。愛媛縣の人。俳人。著書には、句集に「長子」・「火の島」・「万緑」など、研究に「蕪村」がある。

俳句は最初、和歌（短歌）から分かれてできてきました。和歌は、あるひとりが上の句を作ると、他のある人がそれを受け取ってとんちをきかして、そのあとへ下の句をつけて意味のとおったものにまとめるのです。これを連歌といいました。それが、時がたつにしたがって後には、

(a)　5・7・5　　(b)　7・7

(c)　5・7・5　　(d)　7・7
(e)　……　　(f)　……

と、(a)と(b)、(b)と(c)、(c)と(d)というように、二行ずつで意味のとおったものにして、五十も百もつないでいくようになりました。

連歌は、形式はこんなふうになっても、内容は長い間和歌で扱うような上品な材料を取りこみ、ことばもやはり和歌で使うような上品なむずかしいことばを使い続けていました。ところが後には、われわれの周囲にあるもっと手軽な材料を取りこみ、ことばも日常使っているようなことばを使うものができてきました。その結果、それは連歌とは、内容もようすもずいぶん違ってきたので、これを連歌と区別して、俳諧（連句）とよぶことになりました。そのうちに連句の第一句を全体から切り離して独立させて、これだけを作ることが流行しだしたのです。この連句の第一句、つまり出発点になる句を、発句といいます。人々はその後、室町時代、江戸時代とずいぶん久しく、連句と発句と両方を作り続けてきましたが、明治時代以後には、もうほとんど連句の方はだれも作らなくなって、発句だけを作り、その呼び名も俳句と改めることになりました。これで皆さんには、俳句の成りたちがはっきりとわかったわけですね。

室町時代　足利氏が室町に幕府を開いてから織田氏に滅ぼされるまでをいう。（一三六―一五七三）

江戸時代　徳川家康が江戸に幕府を開いてから明治改元までをいう。（一六〇三―一六六七）

次に俳句の規則を説明しましょう。

まず第一に、形、形式上の規則です。それは「俳句は十七音の長さである。」ということです。たゞ十七音の長さでなんでも言えばすぐに俳句になるのではなくて、かならずそれが、意味と調子とのうえで五音・七音・五音の三つの部分に区分されていなければいけません。

第二に内容についての規則。それは「俳句は、一句の中に季題というものをかならず一つはよみこまなければならない。」ということです。十七音の長さであって、同時に五音・七音・五音にくぎられていても、もしその中に季題というものが全然含まれていなかったとしたら、それは俳句ではなく、俳句としては通用しないのです。

季題（季語ともいいます）ということばは皆さんには、おそらく耳新しいでしょう。季題というのは――(a)「四季の中のどれか一つの季節」か、(b)「その季節に自然界にめだって表われてくる事物」か、(c)「その季節の間に人間界にめだって表われてくる事物」か、(d)「その季節の間に人間が行う事柄」かをさしていうのです。

たとえば「春」の季題を幾つかあげてみると――右の説明の中の(a)にあたるものは、春・二月・三月など。(b)にあたるものは、春風・かすみ・櫻・すみれ・ちょう・うぐいすなど。(c)にあたるものは、風車・草もち・白酒など。　にあたるものは、入学式など。

つまり、皆さんが春の間にじっさいにそれらのものにぶつかった際、「これらのものは春でなければ見られないものであるし、いかにも春らしい感じの強いものだ。」と感じられるようなものは、たいがいみんな春の季題なのです。たゞ、季題の中には、少数ですが四季のじっさいのありさまをもとにしないで昔からの長い間に人々がむりに考えて、機械的に四季のどれかに割りあて、入れてしまってできた季題があります。その不便を救うために、世の中には季題の手引となる歳時記という書物がたくさんにあります。これを調べてみれば、手軽に、何がどの季題かということがすぐわかります。

歳時記　季節に関する事物を列記した本。歳事記または季寄せともいう。

次に俳句には「切字」というものがあります。切字とは、一つの俳句の中で意味の切れめになるこ

とばがどんなことばでもみなそれなのですから、それのことはどうでもよくて注意する必要はないのですが、たゞ切字の中の二つだけ、俳句以外ではあまり使わない特別なものがあります。「や」と「かな」です。「や」も「かな」もともに、それ自身では特別の意味を持っていないことばですが、これらのことばを他のことばのあとへつけると、調子のうえでその部分がひじょうに強くなって、そこへ氣分が集中されるようになるのです。つまり「や」や「かな」がついていると、その場所へ、調子のうえで氣分の中心ができるのです。それで昔から俳句においては、一句の中に「や」と「かな」とを同時に両方とも使ってはいけないという禁止が規則として定められています。これが第三の規則です。

俳句にはまた、「季重なり」ということがあります。そして「季重なり」は禁止というほどではありませんが、できるだけそうならないように避けなければいけません。「季重なり」というのは、一句の中に季題が二つ同時に使ってある場合のことです。たとえば

ひまわりやアイスクリームたべにゆく

という句があったとします。ひまわりもアイスクリームも夏の季題です。つまりこの句は「季重なり」になっているのであって、いったいひまわりのこととその氣分を主にしてよんでいるのか、アイスクリームとその氣分とを主にしてよんでいるのかわからなくなり、この一句は氣分の統一のない失敗作になっています。

俳句ではまた「三段切れ」ということをたいへんいやがります。これも絶対にそうならないように心がけねばいけません。

たとえば次の句のような場合です。

虹立ちぬ　鳥鳴く野路や　帰りけり

表現が二箇所で切れているので、全体が三部分に分裂してしまって、調子のうえで統一がありません。この句はぜひとも、

虹立ちて鳥鳴く野路や　帰りけり

とか

虹立ちぬ　鳥鳴く野路を帰りけり

のように切れめ一箇所だけに改めるとか、どちらかにしなければいけません。皆さんは注意していて、一句は表現のうえで切れめが一箇所以上にならないように努めてください。

以上の事柄がよくのみこめたら、さあ、皆さんはこれからどし〳〵俳句を作ることにかゝってください。ほんとの愉快さはこれからこそ始まるわけなのです。

（「やさしい短歌と俳句」による）

【学習の手引】

(1)「短歌について」を読んで、散文と短歌との違いについて話しあう。

(2)短歌の形式について話しあう。

(3)短歌の余情というのはなんであるかを考えて話しあう。

(4)めい〳〵短歌を作って発表しあう。

(5)「俳句の世界」を読んで、俳句はどのようにして生まれてきたかを話しあう。

(6)俳句を作るときのきまりを調べてみる。
(7)めい〳〵知っている俳句を発表しあう。
(8)今の季節に取材して俳句を作り、発表しあう。

五地藏の話

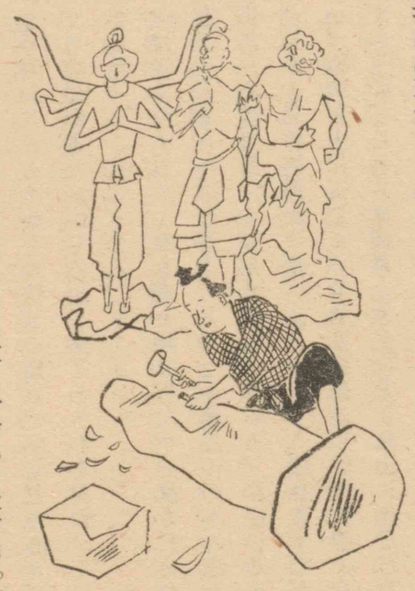
長與善郎

長與善郎は、明治二十一年（一八八一）東京で生まれた。小説家。評論家。東京大学に在学中から「白樺」同人として活躍した。著書には、「項羽と劉邦」・「竹沢先生といふ人」・「韓非子」・「野性の誘惑」などがある。

なんでもいちばん先に私がある感じを覚えだしたのは胸のあたりだった。首から乳へかけての辺が急にすうっと涼しくなったのをかすかに覚えている。次には右の腕に感覚を生じた。ひいやりとした外氣に触れて私は思わずその腕を震わした。初めにはそのたれている腕が少し重い氣がしたが、やがてそんな氣もしなくなった。なんでもその腕の形が少し変わったらしい。最初だらんとたれ下がっただけであったのが、やゝ前の方に曲がって、中指でひだの所をちょっとからげた形になった。それからその腕が軽くなった。

その次には左の腕に、それから手に感じを覚えた。前の方に折れて、てのひらの上に何か玉をさゝえているのだが、これは初めから重い氣はしなかった。それから背中・両脚・腹部とだん〳〵感覚を生じてきて、頭部にきた。頭部の中ではほおがいちばん先に感覚を始め、その次に額が涼しくなった。私の目はまだあかなかったが、私はもうあふるるばかりの光を内部に感じていた。そして私は、涼しい朗らかな喜びを感じた。

次には耳ができた。そして私にはいろ〳〵の世音が聞えるようになった。もし両方の耳が一時にあいたら、私はとても堪えられなかったろう。しかしその喧騒な雑音の響に私が慣れてくると、あたりはふしぎなほどの静寂に移って、たゞ私を造っている者の小さなのみの音だけが聞えた。



最後に私の両眼があいた。私の目があいていちばん最初に見たものは、私の目をじっと見つめている二つの光った目であった。私はその目の力に驚いた。恐れをなした。

するとその恐ろしい目の持ち主は一歩あとにすさって大願成就した者のような押さえがたい興奮のていで、低く、重く叫んだ。

「ありがたい。生きた。」

そして彼は小づちを持った右手と、細いのみを持った左手とを堅く合掌して私の前に頭をたれ、力のこもった感謝の声で、「なむあみだぶつ」と唱えた。

私はすぐその男に親しみを感じた。ういやつだわいと思った。頭は少しはげているが、どこか子どもらしい、純良な心を持った男だということはその目と口とを見ればわかった。私は彼の全身を自分の心のようにぴったりと感じたとき、胸が熱くなるのを覚えた。

彼が私の後にまわったとき、私は前方から私の上にまともに当たってくる日光をはじめてじかに感じた。その感じはおそろしく白いものだった。私はそのまぶしさにちょっと目を苦しめられたが、しかし全身になんともいえぬ快さを感じ、からだと心とがぬくまるのを感じた。私はまたその光の流れてくる窓のかなたにおそろしく美しいものを見た。それは青空と、雲と、緑の木の葉と、桃色の花とであった。

次にはまたいろ〳〵の音声を耳にした。それもだいたい私にはいやなものではなかった。ことに町に遊ぶ子どもらの声などは、ちょっと禽鳥の声かと思われたほどかわいくきれいなものに聞えた。少し慣れた心持であたりを見まわしてみると、私のいるへやのほこりっぽくてむさ苦しいさまがわかった。しかも私の周囲にはずいぶんいろ〳〵異様なものがいる。腕の六本あるもの、首だけのもの、象という獣の背上に座しているもの、恐ろしい怪物のような相好のもの、天人のように柔和な美しいようすのもの、それらは皆私より先にこの地上に生まれた私の同胞で、どれもこれも私の上に目を見すえているのだ。しかし私はすぐ彼らと自分の心があい通じていて、私たちが別々な心をもってこの世に生まれたものではなく、私は彼らとらくに話ができることを直覚したから、少しもそれに圧迫などは感じなかった。

で、私の周囲は清潔ではなかったが、それに少し寒くもあったが、私は生まれて來たことをけっしていやには思わなかった。むしろ私は満足だった。私を造った者も生まれたことをいやとは思っていない。どちらかといえば少しのんきなくらい樂天的な男らしい。

まもなくいろ〳〵な人が私を見に來た。「拜ませていたゞきます。」と言ってはいって來た。そして彼らは私の前にすわり、香をたき、じゅずをもんで、何か口の中でむにゃむにゃ言って私を見上げて、「はあ、けっこうなみ佛様だ。」と言ったり、「聞くにもましたおみごとなできばえでござる。」とか、「ありがたい。」とか言った。ある者はまた白紙に錢を包んで私の前にさゝげた。私はくすぐったいようなおかしい氣がした。彼らの言ういろ〳〵の賞賛のことばや、することは、いっこう私の心に届きはしないけれども、かわいい氣はした。こうしてその日も次の日も、多数の男女がいり代わりたち代わり私を見物に來て、同じようなことを言ったりしたりした。

「良弁僧正や、天竺の問答師のお作にも劣らぬけっこうなお作じゃ。ほんに生きてござるようじゃで、あまり見ていると恐ろしゅうなる。」

こんなことを言った者もあった。

「佛のおかげです。まったく佛の法力のよることです。」

私の作者は満足らしくこう言って、にこ〳〵していた。

ちょっとこゝで、私がうしろから立ち聞きした、人の語りぐさをまとめて言っておきたい。私の作者は僧侶であったか、俗人であったか、私はよく知らぬ。とにかく妻もあり子もあった。だからふつうには出家とみなされていなかったことは確かで、いわゆる佛師とよばれている者であったらしい。

出家でもない者が神聖な佛体を刻むことはばちあたりとやらで、彼は迫害をうけたこともあるという。そのとき、彼の手から、のみは奪い取られた。すると彼は土や乾漆で前のよりいちだんとみごとな佛像を造った。それが六本腕のある観音像であるとか。

が、その仕事もとがめをうけたので、今度は筆で佛の絵をかいた。それでその筆もまた取り上げられたという。そんなことで生活は苦しくなったので、彼の妻は、彼をそんなに苦しめるのは自分がいるためだと言って、彼と別れて尼になる決心をしたが、彼は信心はそんな形のものではないと言ってその必要を認めなかった。

彼は自分の仕事が佛の道にかなっていることをあつく信じていた。「彫刻の祕密はよろずの相のうちに隠れている佛を、おのれが佛によって呼びさますことだ。佛を呼びさまされた者は生きている。生きている者は皆美しい。美は佛の相だ。一つでもほんとうに佛の相が刻まれたら佛のしもべたる自分の使命は足る。」そう彼は言っていた。ともあれ、彼はどんな運命の中でも絶望したり身をもちくずしたりするにはあまりに帰依の心が純で深かった。彼のこの現世に対する態度は、この世の彼に対する態度のいかんによって動かされるようなものではなかった。いかに暗い境遇の中にいるときも、彼は不幸な人間のようにはまるで見えなかった。それほど彼はいつも和氣あい〳〵たる明かるい心をもっていたので、彼と接することはだれにも氣持がよかったに違いない。けっきょく、佛体を刻みさえしなければさしつかえないというのでふたゝびのみは彼に與えられた。彼はそれでいろ〳〵のものを彫刻することを覚えた。しかし彼が何氣なくたゞの人物を彫ると、たちまち彼がまた佛像を刻んでいるといううわさがたった。それも道理、じっさいそれは期せずして新たなる佛像のごとく見えたから。ふつうの女人も彼の手にかゝれば吉祥天女のごとく輝いた。これぱかりはいかんともしようがないので、とゞのつまり、東大寺のなんとかいう和尚の許可で、彼だけは特に在家の身で佛像を造ってもよいということになった。それ以來彼はかえって有名にもなり、生活もわりにらくになった。

彼の生活についてはだいぶいろ〳〵の非難もあったようだ。彼はごく無邪氣な、無頓着な男だった。人のところで酒を出されれば、それを拒まなかった。本來、酒は好物だったらしい。あるとき彼がちどり足で友だちのところからふら〳〵と帰って來るところを運悪く人に見つかって、それがまた一物議をかもしたことがある。

が、それはとにかく、彼がその工室でのみを片手に持ち、右手に槌をとって一心に合掌默禱して後、じっと作に向かうときのようすは、まるでふだんとは別人の観がある。全身霊魂のかたまりかと思われ、何か恐ろしいものにつかれた者のように見える。その全身全心にみなぎる熱と夢中さとは、雲をも呼び起す力があるかとみえる。しかし彼はけっして勢いよく、興奮したていでそれにかゝりはしない。人間にこれほどの荘重な静寂が表われうるものかと思われるほどの重い、端厳な姿で、彼は限りなきていねいさと、細密きわまる丹念をもってこつ〳〵かすかなのみの音をたてている。どこをそんなにいつまでも執拗につっ突いているのかちょっと見たのではわからない。二日も三日も一つの小さい部分にかゝっていながら、その労力はすべて作の内側に吸收されてしまったように表には変わりめがまるで目だたぬことがある。そんな隠然たる労力がときにはずいぶん長い間続くので、日の暮れにのみを手離すときはさすがの五体も綿のように疲れてみえる。そのとき彼は一杯、彼のいわゆる般若湯をもきこしめしたくなるらしい。

般若湯　僧家での酒の呼称。

「梵鐘には黄金をたくさん混ぜないといい音色は出ない。だがその黄金は銅の中に隠れているのだ。よき彫刻を造るにもその隠れた黄金がだいじだ。」

彼はこう言ったことがある。

だが、私が彼のわきにいたのは長いことではなかった。なんとかいう寺の住職が私を引き取ることになった。いよ〳〵彼の家から私が運び出されるとき、彼は私にこう言った。

「おまえは苦労するだろう。わしも少しは苦労した。わしに寂しいときがあったようにおまえにも寂しいときが多くあるだろう。だがおまえを造ったことでわしはとこしえに生きるだろう。わしの名はわしのからだのようにじき消える。わしの名はけっして後世に傳わりはしまい。だがそれでもよい。わしのうちに生きたもうた佛のうつし身であるおまえは死なない。おまえは木の破片だ。燒かれれば煙となってしまうのだ。だがそれでもおまえが造られ、そして生きたという事実は死なない。永遠に生きよ。人の心を打て。深く、深く、打て。そしてそこに佛を呼びさませ。さらば健在であれよ、しあわせであれよ。わが血と肉よ。」

そして彼は寂しそうに、つらそうに私をなでた、彼の名まえは義道といった。その名まえを知っている者は今では私だけだ。

私の買われた寺は小さな、貧しい寺だった。なんでもたいそう安い値だったというが、大きな名ある寺では彼の作物は買わないことになっていたとみえる。私がその寺の者になってからも彼はおりお

閼加佛に供える水。

伽羅別名じんとう。東インドで産する香木。

びくに出家して大戒をうけた尼僧。

り私を見に來た。私の置かれた場所は本尊の藥師三尊からずっと隔たった本堂のすみの薄暗い所で、参拜者は私に目も止めずに帰ることが多かった。

ところがそれから半月もたゝぬうちに、私はだれかの目に止まったのが縁で、他の寺に移されることになった。義道からまるでたゞのように私を買い取ったかの和尚はそのことでにわか分限の身のうえになったとか。

それは前のよりは数倍大きくもあり、りっぱでもある寺だった。そして私は前よりもずっとだいじにされた。毎朝私の前に新しい閼加がたむけられ、かおりよい伽羅がたかれ、左右には寺に咲く種々の花がいけられ、私の周囲ははき清められた。

そこには何よりもまず優美があり、しんみりとしたもの静かさがあり、かなりのまごころと細心とがあり、しぜんな礼があった。それらの花のうちに包まれて、私は安泰と悦樂とを感じた。前の寺は眞夏にも変に寒かったが、この寺の中は厳冬にも暖かい。少し暗くなるとねずみが出て、私の足の甲の上をちょろちょろ駆けるときはむずかゆく、いやな氣持であったが、この暖かみは私の何にもまして愛するものだ。それは尼寺であった。私に仕える者は皆びくにである。

私がその尼寺に移って七日めには私のために大きな法要が営まれ、数百の人が参詣した。その頭首となって來た人は、私がそれまで人間のうちに見た最もみめかたちの美しい人で、身にはあざやかな緋の衣をまとい、頭には輝く宝冠をいたゞいていた。で、私はそれが皇后という身分の御仁であることをさとった。

紫・もえ黄・とび色・褪紅色・黄などさま〳〵の色の衣を着け、かわいい頭をば青くそりたてた品

よきびくにらが日々に念佛を唱えながら、堂の中を織るがごとくねりまわるさまは、いとも愛らしく美しいものだった。私は極樂に住む稚児たちの遊戯を見るようなこゝちで、樂しくそれをながめた。私は何にもまして人のまごころを好むけれど、またかゝる形式のおもしろさを愛するものだ。それは心の美とあいまって、淨土のうるわしさを人に示唆するものだ。

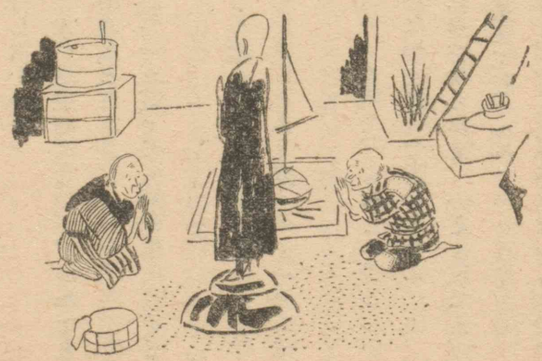
ある風の吹く春の深夜、くりから火を発して、びくにどもの、黄色い声をたててあわて惑ううちに、みる〳〵本堂は血のような火焔に包まれ、しゅみ壇は怒れる不動明王のごとく燃えた。華麗をきわめた堂のうち、何一つ余すものはなく灰になった。たゞふしぎにも、ひとり私だけはひだのすそを焦がし、全身の色を変えただけで取り出された。私を取り出した者はやはりひとりの尼であったのだが、そんなことはか弱い女ひとりの腕ぐらいではとうていかなわぬこととというので、私自身のふしぎな法力によるとされた。

しゅみ壇　寺院で佛像を安置する壇。

長い〳〵年月がそれからたった。所々方々の寺々を私は轉々してまわった。しかしその後、尼寺には地藏尊は置かぬということにでもなったものか、一度も行ったことがない。絵巻物を展ずるごとく移り変わる世相をつぎ〳〵とながめることは興ないことでもなかったが、おゝむね私は寂しい思いであった。そのうちにも都がよそに移ったとかで、法要や祭りはまれになり、雨は私のこめかみの上に漏り、くもの巣は私のひじとわきとの間に張るようになった。そうこうするうちにまたもや火災になった。それは戰乱のために寺を燒きうたれたのであった。どういう運か、私はそのときもやはり灰になることは免かれたが、ほおり出されたとき下になった私のひじは半ばもげてなくなった。

なんのためにそのとき私が助け出されたのか、これも今なおがてんがゆかぬ。なんとなれば、私はそれきりしばらくの間は燒け跡の空地に投げ捨てられたまゝであったからである。あるいは寺の僧が私を持ってのがれようとしてそのひまがなく、逃げうせたのであろうか。かくて青てんじょうの私の周囲はがらんとして明かるくはなったが、私の上には風雨が吹きさらし、雪は積もった。煙にいぶされ、ぬれた上を日に照りつけられて、私の色はます〳〵黑く、しみだらけになった。そして濕地に触れている私の背中は腐朽し、虫が食った。これが何よりいちばん氣持が惡かった。

ある目の惡いばあさんは私を何か丸太の端くれとでも思ったものか、しばらく私の腹の上に腰を掛けて一服しながら休んだが、「やれやれ、情ない世の中になったものだ。あみだ様はこの荒れ方をなんとながめてござらっしゃるだろう。なんだかまだありがたい灰のにおいがする。あゝなんというばちあたりめ。」と言って去ったが、その後またひとりの見しらぬ僧が私のそばを過ぎ、私に氣づき、「おお、もったいない。」と言って私を抱き起して立たせ、そして「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」と唱えながら去った。



幾度となく春はき、秋はさった。私はたいくつで、孤独だった。そしてからだがしだいに朽ちてゆくのを感じた。しかし私の心はわびしいなりにのどかであった。人はたずねて來なかったが、ひばりや、すずめや、からすは來た。小鳥は私の頭に止まり、肩やひざにふんをたれた。私はそのかわいい声を樂しく聞きながら、うつらう

つらと眠った。うと〳〵しているうちに、またがや〳〵とそう〳〵しい音を幾度か耳にした。それは耳のわきで蚊の群れが騒いでいたのか、それともまた例の戰爭を始めていたのか、いずれとも知れぬ。いずれにしても私には用のないものだから、私は眠い目を開こうともしなかった。

ふと目をさますと、私は小さな屋根の下にいた。それは百姓家だった。坊主ではないが、いかにも人のよい、このごろの世には珍しいあたゝかい心を持った感心なじいさんとばあさんだった。なんでも私が原の中で鳥のふんを浴びているのを見て、「とんでもないことだ。」と言って夫婦で車に載せて家へ持って來たのだそうだ。

「あんまりひどくよごれてなさるからねえ。」ばあさんはこう言ってどろだらけの私のからだに水でぞうきんがけをし、顔をばたわしでごし〳〵こすってくれた。そしてじいさんをふり返って、「まあ見なせえ、こんなきれいな佛様におなりなすった。」と言った。

ところがある晩、ぬきみの刀をさげてほおかむりをした大の男がはいって來て、なんとか恐ろしい顔でこの老人夫婦をおどかしていたが、けっきょく何も得るところがなかったので腹だちまぎれに、私をこわきにかゝえ外へ出た。外へは出たが、重い私が荷やっかいになったとみえ、「えゝ重てえ、めんどうくさい、このでくめ。」と言いざま私をまた道ばたへほおり捨てて行った。

世はまた乱れた。だれも私などに目をとめる者はなかった。しばらくたって、私はまたしても拾われて、さる貧しい紙商人の手にあった。

ある日、その店にぬっとはいって來たふたりの男の風ぼうを私は長く忘れないであろう。ふたりとも太いひげを鼻下にたくわえた背の高い大男であったが、一方は私がかつて見かけたことのない金髪と青い目の持ち主で、みなりもまったく変わった珍しいものだった。

「つかぬことをお願いするようですが、お宅にあるという地藏さんをちょっと拜ませてもらえませんかいな。」

見るからひと癖ありげなたくましい相好の日本人の方がこう主人にことばをかけた。

「お上がりなせえ。そこにありまさ。なにね、こないだある家の前を通ったら、そこのかみさんが、この地藏さんをぶち割るの、たきぎにするのと言ってるんで、もったいないことだ。たきぎにするなら私がもらおうと言って、小刀一ちょうと引き換えにもらって來たんですがね。」

「ちょっとその灯を。」

何か熱に浮かされたようなようすで相手を顧みた男は、主人から、こう言って燭台の火を借りると、それを私の顔といわず、手足といわずくっつけて、穴のあくほどまじ〳〵と見入るのだった。そのふたりの眼光の燃えるような鋭さといったら、まるであの私を造った義道のまなざしそっくりだ。しかもふたりの使うことばといえば、これまた私のかつて聞いたことのないことばなのだ。「ワンダフル。」「スプレンディッド。」なんのことかわからないが、こんなことばが何遍となくふたりの口からほとばしり出るのだ。見うけるところ、その黄色い髪の毛の人の方が師匠株らしく、「オカクラ」「オカクラ」と相手を呼び、片方は「フェロノサ」とか「フェノロサ」とか連れを呼んだところを見るとそれがこの両人の名まえらしい。

とう〳〵私は縁がわの明かるみへ運び出されてしまった。久しぶりで日のめというものを浴びたときは、まぶしいようだった。しかしそこへ私を運ぶにしても、その氣をつけて私をだいじにすること

ワンダフル　驚嘆する。

スプレンディッド　すばらしい。

オカクラ　（一八六三―一九三三）岡倉覚三。号は天心。美術家。

フェノロサ　（一八五三―一九〇八）アメリカの美術家。哲学者。

といったらない。もしちょっとでも何かに触れたら、私のからだはすぐ砕けると思っているようだ。そんなめに会ったことのない私はなんだかおかしくさえなった、そうしてその日のめの下でわからないことばをかわし続けながら、まるで小踊りせんばかりのふたりの興奮のしかたというものも、これまたこっけいなくらいだった。なんでも私がいつ作られたかということをしきりと詮議していたらしい。

「いったい、いつごろの作でしょうかな、時代は。」

私がだれの所有に属するものかをも忘れたように取り扱われているのに、いさゝか不安になったらしい主人が、こう言って尋ねた。

「そう、まあ天平ではないらしいが、藤原よりは古いことは確かだろう。まず弘仁あたりかな。」

「弘仁といいますと。」

「千年以上前です。そんな昔に、こんなすばらしい、世界のどこにも類のない傑作がわれ〳〵の先祖の手で造られたんだから、肩身が廣いじゃありませんか。」

なんだかひじょうに私はうれしかった。長いこと待っていた会うべき者に、ついに会ったという氣がした。そして今このふたりのことばをあの義道が聞いたら、どんなに満足するだろうと思わずにはいられなかった。

こうして私はまたもやぞの紙商人の手を離れることになった。私は今ではこの博物館の彫刻部の一室に、ガラス張りの大きなわくの中に、十一面観音や、普賢菩薩・孔雀明王の像たちと並べられて、静かに公衆の面前に立っているのである。

天平（七四九―七六六）
弘仁（八一〇―八二三）

私の前には白い紙の札がていちょうに立てられ、それにこう書いてある。

「地蔵菩薩像。木彫。弘仁時代。作者不詳。――國宝。」

（「新日本文学選集」第一巻による）

【学習の手引】

(1)この文のすじを短いことばで言ってみる。
(2)地蔵のできあがる順序を読みとって話しあう。
(3)地蔵の境遇の移り変わりを、箇條書にしてみる。
(4)そのときそのときの境遇を、地蔵はどう考えてとおってきたか調べて話しあう。
(5)次の問題について調べ、表現について学びえたことを話しあう。
イ、義道はどんな人であるか。
ロ、フェノロサと岡倉覚三とのふたりの感激を、どう描いているか。

六　すずめ恩を報ずること

（宇治拾遺物語）

われ〳〵が小さい時から聞きなじんでいる「したきりすずめ」のおとぎ話は、この課の文がもとであるといわれている。この文は、鎌倉時代の説話文学である「宇治拾遺物語」によったものであるが、今傳えられているものに比べると少し変わっているところがある。どのようにして変わったのであろうかなどと考えると、興味が多い。なつかしいおとぎ話を読んでみよう。

今は昔、春つかた、日うらゝかなりけるに、六十ばかりの女ありけるが、虫うち取りて居たりけるに、庭のすずめのしありきけるを、わらはべ、石を取りて打ちたれば、当たりて腰を打ち折られにけり。羽をふためかして惑ふほどに、からすのかけりありければ、「あな心憂、からす取りてん。」とて、この女、急ぎ取りて、息しかけなどして、もの食はす。小おけに入れて夜はをさむ。明くれば米食はせ、銅、薬にこそげて食はせなどすれば、子ども孫ども、「あはれ、女の刀自は老いて、すずめ飼はるよ。」とて、憎み笑ふ。かくて、月ごろよく食へば、やうやうおどりありく、すずめの心にも、かく養ひけたるを、いみじく、うれしと思ひけり。あからさまにものへ行くとても、人に、「このすずめ見よ、もの食はせよ。」など言ひおきければ、子、孫など、「あはれ、なんでふすずめ飼はるる。」とて、憎み笑へども、「さばれ、いとほしければ。」とて、飼ふほどに、飛ぶほどになりにけり。「今は、よも、からすに取られじ。」とて、外にいでて、手にすゑて、「飛びやする、見ん。」とて、さゝげたれば、ふら〳〵と飛びていぬ。女、「多くの月ごろ日ごろ、暮るればをさめ、明くればもの食はせ習ひて、あはれや、飛びていぬるよ。また來やすると見ん。」など、つれ〴〵に思ひて言ひければ、人に笑はれけり。

さて、二十日ばかりありて、この女の居たる方に、すずめのいたく鳴く声しければ、すずめこそ、いたく鳴くなれ。ありしすずめの來たるにやあらんと思ひて、いでて見れば、このすずめなり。「あはれに忘れず來たるこそあはれなれ。」と言ふほどに、女の顔うち見て、口より、露ばかりのものを落しおくやうにして、飛びていぬ。女、「何にかあらん、すずめの落していぬるものは。」とて、寄りて見れば、ひさごの種をたゞ一つ落しおきたり。「持て來たるやうこそあらめ。」とて、取りて持ちたり。「あないみじ、すずめのもの得て、宝にしたまふ。」とて、子ども笑へば、「さばれ、植ゑて見ん。」とて、植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多くおひひろごりて、なべてのひさごにも似ず、大いに多くなりたり。女、喜び興じて、里隣の人にも食はせ、取れども取れども、盡きもせず多かり。笑ひし子、孫も、これを明け暮れ食ひてあり。一里配りなどして、はてには、まことにすぐれて大きなる七つ八つは、ひさごにせんと思ひて、内につりつけておきたり。さて、月ごろへて、「今はよくなりぬらん。」とて、見れば、よくなりにけり。取り降ろして、口あけんとするに、少し重し。あやしければ、切りあけて見れば、ものひとはた入りたり。「何にかあるらん。」とて、移してみれば、白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大きなるものに、みなを移したるに、同じやうに入りてあれば、「たゞごとにはあらざりけり。すずめのしたるにこそ。」と、あさましく、うれしければ、ものに入れて隱しおきて、残りのひさごどもを見ければ、同じやうに、入れてあり。これを移し〳〵つかへば、せんかたなく多かり。さて、まことにたのもしき人にぞなりにける。

【学習の手引】

(1)この文のすじをふつうのことばで言ってみる。

(2)この物語と似た話を思い出して話しあってみる。

(3)むずかしいことばを、辞書で調べて発表しあう。

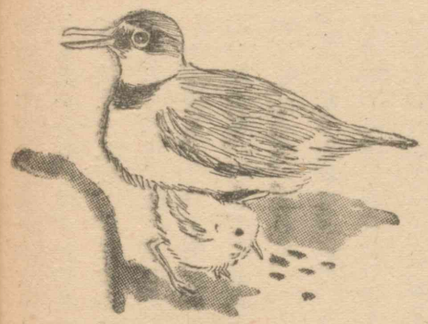
(4)全文を、五、六歳くらいの子どものための話として、やさしく書き直してみる。

七ちどり

下村兼史

一学年で、シナリオの書き方や映画の誕生について学んだから、こゝでじっさいの作品に触れてみよう。春から夏へかけていろ〳〵な鳥が卵をかえす。本課はそれに取材した文化映画のシナリオであるが、文学としてのシナリオのもつ味わいを見落さないように読んでいこう。ちどりのひながかえるのは夏であるが、もうまもなく巣が見られるであろう。

下村兼史は、明治三十六年（一九〇三）佐賀縣で生まれた。映画脚本家。東宝教育映画部勤務。著書には「野外鳥類図譜」・「北の鳥南の鳥」などがある。



F・I　しだいに画面が明かるくなること。

あじさしかもめ科の海鳥。全身白く頭部が黒い。

よしきり　夏季水辺に群れてやかましく鳴く小鳥。

字幕
ちどり
第一製作部
作品。
（F・I）

1　川

日の出。
朝日に輝く河原。

川水がきら〳〵と光る。
川床の小石も光っている。
ちどりが水辺を歩いている。
あじさしは川岸の小石に羽を休めている。

2　河原

あしのとゞえでよしきりがさえずっている。
よしきりの親鳥、巣にはいゞたり出たりしている。

なぎさをちどりがちょこちょこと歩いて行く。

3　河原へ渡る

河原には遊ぶ四、五人の子どもたち。
堤防の上で、とも子が見ている。
手にピノチオの人形を抱いている。
とも子は水を渡って河原へ行く。
とも子は河原の岸に立ち、はじめて見る世界に目を見はる。
白い砂、きれいな草花。ひばりが鳴く。
とも子は花を摘み歩く。

（合唱）

こゝら河原は　よい河原、
花は白ゆり　つきみそう。
ひとりうたえば　ちどりも遊ぶ、
みんなこい〳〵　寄っといで。

とも子は愉快になって、ピノチオを抱いたまま、草花をかゝえたまゝ踊りまわる。
だん〳〵足どりが激しくなる。
浮かれすぎて、草花をばら〳〵と落す。
しまいにピノチオもほおり出す。
ピノチオが空に踊って砂の上にころがる。

4　ちどりの卵

砂の上にころがったピノチオの、その指先に三つの卵がある。
とも子、はっと驚く。
「まあ卵、なんの卵かしら。」
きれいに並んだ三つの卵をとも子は見つめる。
とも子は指先で卵にさわってみた。卵はあたゝかい。
「まああたゝかい。生きているんだわ。」
つまんだ一つを思わずほおに当てた。
親ちどりがそのあたりを飛びまわる。
とも子はそれに氣がついて卵を置く。
卵はばら〳〵に置かれてある。
とも子はもっとたくさんの卵を捜してみたいと思って立ち上がる。
とも子は方々を歩きまわった。川を渡り、小石を踏んで卵を捜したが見つからない。

とも子はさっきのピノチオのことを思い出した。

「そう〳〵、ピノチオさん、さっきみたいにまた卵を教えてちょうだいよ。ね、お願いだから。」

とも子はぐる〳〵とまわって、ピノチオをぽんとほおり投げた。

ピノチオの指先には捨てられたげたが一つ。

「なあんだ。げたじゃないの、げたじゃしょうがないわね。」

しかるようにピノチオに言う。

「こんどはきっと卵よ。一、二、三。」

落ちたピノチオの指先――とわれたセルロイドのきんぎょ。

「こわれたきんとと。わたしこんなものほしかないのよ。」

とも子、がっかりして元の所にもどると、さっきばら〳〵にしておいた卵がきちんと並んでいる。

とも子、驚く。

「まあ、だれがやったのかしら。だれかいじったんだわ。取られないうちに持って帰ろうかしら。」

とも子はハンカチに卵を包みかけたが、ちょっと手がしぶる。

「でもかわいそうね。」

親鳥らしいちどりが二羽、頭上を飛ぶ。

「あ、親鳥かな。そう〳〵いいことがある。」

とも子は卵を元にもどしてハンカチをかぶせた。

そのま〵にしてとも子は、くさむらに隠れた。

そこへちどりは、近づいて來て卵にかぶせてあるハンカチのぐるりを歩く。

ちどりはハンカチを引っ張ってみる。

動かない。また引っ張る。

する〳〵とハンカチは引きずられた。

その下から卵が現われた。

ちどりはハンカチをくわえたま〵飛び去る。

とも子はあきれて身を起す。

ハンカチはちどりのくちばしから放れ、ひらひらと川の中に落ちる。

そして靜かに流れ去る。

（F・O）

F・O
画面がしだいに暗くなり次の画面に移ること。

（F・I）

5 愛着

とも子、柔らかな堤防の草に寢ころんで日記を書いている。

書いているものはちどりの絵だ。

とも子、望遠鏡をのぞくと、ちどりが卵を抱いているのが見える。

手引書と照らしあわせてうなずく。

また望遠鏡をのぞくと、とんどは違ったちどりが映った。

手引書を捜すと、「しろちどり」とある。

（とも子の朗読）

「よいお天氣の日でした。川を渡って中州で花を摘んでいるとき、思いがけなく小石の中に卵を見つけました。卵は石の中に三つありました。小石によく似ています。浅い穴にきちんと並んでいます。形は西洋なしのようです。卵の親はこちどりでした。大きさはすずめより少し大きいくらいです。白い胸のとこ

ろに黒い筋があります。しろちどりはこちどりによく似ています。しろちどりは胸がまっ白です。あじさしという鳥もいます。この鳥も石の中に卵を産みます。

とも子の書いた日記帳には、あじさしの絵がかいてある。

とも子、また望遠鏡でのぞくと、こんどは河原を歩いて來る四人の少年たちが目についた。

（とも子の朗読）

「こちどりの卵がいつ産まれるか私は樂しみです。ひなが産まれるまで卵を人に取られることが心配です。」

少年たちは、川を渡って近づいて來る。

とも子、卵を見つけられないように石で囲いを作っている。

少年たちはいよ〳〵近づいて來る。

少年たちは捕虫網や毒びんなどを持っている。

少年たちは川の流れの中に立ったまゝこんなことを言っている。

A「ほしいなあ、ちどりの卵が。」

B「どこにあるんだろうね。」

C「ちどりってこんな所に巣を作るのかい。」

A「河原にあるって本に書いてあるよ。」

C「ぼくこないだ見つけたよ。」

A「何を。」

C「卵をさ。ちどりの。」

B「じゃりの中にあったんだろう。」

A「それがちどりの卵だよ。どうしてぼくに教えてくれなかったんだ。」

C「ぼく、食べちゃった。でもなか〳〵見つかんないよ。」

D「ぼく、ほしいなあ。」

A「ぼく標本にするよ。」

C「ぼくはまた食べたいなあ。」

A「じゃあ、みんなでじゃりの中を捜そうよ。」

B・C・D「うん。」

少年たちはまた歩きだす。

A「あっ、そう〳〵、さっきの虫を忘れちゃった。あゝあった。これ毒びんに入れといてくれ。」

C「ちどりの巣がないかなあ。」

A「見つかるときはうっかりしていてもあるもんだがなあ。」

Cが鳥の羽を一本拾った。

C「あっ、これはちどりの羽だよ。」

A「なにい、こりゃからすのしっぽじゃないか。こんなもの拾うなよ。」

とも子、いよ〳〵少年たちがこっちへ來ることを知って、とりあえず卵に砂をかぶせて、そこを離れる。

ちょうどそこへ少年たちが來る。

頭上をちどりの親たちが飛び騒ぐ。

A「あっ、親鳥だよ。」

C「きっとこの辺に違いないよ。」

A　卵のかたわらの石に上がる。

C「ちどりの卵って石っころにそっくりだね。」

B「そう〳〵、まるで石っころみたいだったね。」

A「いくつだった。」

C「三つだよ。」

話しながらAは足で石を動かすので、今にも卵がつぶされそう。

とも子、そのつど「あっ、あっ」と声を出す。

とう〳〵たまりかねて少年の方へ向いて大声を出す。

とも子「おうい。」

少年たち、不審に思う。

A「なんだろう。行ってみようか。」

少年たち、とも子の方へ走って來た。

A「なんだいきみ、大きな声で呼んだろう。」

とも子「あんたたちを呼んだんじゃないわよ。」

A「こっち向いておういと言ったじゃないか。」

とも子「大きな声を出したくなっただけよ。」

Cがとも子の帳面を見つけた。

C「うわあ、うまいな。写生帳だね。」

A「あゝ、ちどりの絵だね。あっ、これは卵だ。」

少年たち、とも子に迫る。

A「きみ、ちどりの卵知ってるだろう。知ってたら見せてくれよ。」

とも子「知らないわ。」

A「だってきみ、写生してるじゃないか。」

とも子「知らないってば。」

空氣はいよ〳〵險悪だ。

そのとき、Bがとんきょうな声で叫んだ。

B「あっ釣れた釣れた。あんな大きいのが釣れた。」

C「あゆだ、あゆだ。」

一同「行こう、行こう。」

少年たち、釣師の方へ飛んで行く。

とも子、ほっとして石を取り除きに行こうとすると、既にちどりは巣にもどって、かぶせた砂を巧みに除いている。

とも子、感心してそれを見つめる。

ちどり、だいじそうに卵を抱く。

（F・O）

ワイプ 画面が消し去られてゆくこと。

6 雨の日（字幕 雨の日）

（F・I）

川の水面にぽつりぽつりと雨が落ちる。かさをさした子どもたちが橋を渡って行く。

とも子、堤防にしゃがんで河原の方を見つめている。

よいまちぐさがしょんぼりと雨にぬれて立っている。

（ワイプ）

7 風の日（字幕 風の日）

河原に吹きつける烈風、煙のような砂ぼこりが河原をおゝっている。

8 かげろうの立つ日（字幕 かげろうの立つ日）

もく〳〵とわき起る入道雲。

かげろうが燃えるように立つ河原で子どもたちが遊んでいる。

とも子は河原の草陰にだるそうにすわっている。

ピノチオ人形もそばにすわっている。

とも子は日記を読み始める。

（朗読）

「きょうで十八日めです。卵はまだかえらない。」

どこかでひばりのさえずる声がする。

とも子は飽きて横になる。そしていつしか眠りに落ちる。

（F・O）

（F・I）

9 ひなの孵化

河原にはかげろうがもや〳〵と立っている。

かげろうの中で水浴びする子どもたちが小人のようにうごめいて見える。

水辺をあじさしが飛ぶ。

岸でちどりが水浴びをしている。

（朗読）

「このごろは毎日暑い日が続きました。強いお日様が照るので、河原はたいへん暑くなりました。ちどりも暑そうです。けれども卵がだいじだから暑いのをがまんして卵を抱いています。ちどりはときゞ〳〵水の所に來てからだをぬらしています。そしてぬれたまゝ、また卵を抱いて冷やしてやります。暑さのために卵の中のひなが死なないように守っているのでした。日がたつとそれがだん〳〵忙しくなりました。」

腹部をぬらしたちどりが巣にもどって來る。

卵を腹の下に抱き、冷やす。

また水辺へ飛び、水にはいって腹をぬらしている。

（ワイプ）

（影絵）

とも子、ちどりに近づく。

ちどり、羽をばた〳〵させて、逃げて行く。

（朗読）

「ちどりの親は前よりも卵をだいじにします。私が卵のある所に近づくと、ちどりはばたばたと飛べなくなったようなふりをします。ほんとうに飛べないのではなくて私をだますのです。だまして私が卵のある所から遠くへ離れるようにするのです。」

とも子、砂上に寝ころんで卵に耳を近づける。

虫めがねで卵を見る。

とも子、卵を観察する。

（朗読）

「私がちどりの卵を見つけてから、もう二十三日めになりました。きょう卵を見ると、小さな穴があいていました。虫めがねで見ると卵の中で何か動くのが少し見えました。その穴がだん〳〵大きくなっていきました。私が耳をつけると、びい〳〵とかわいい声が聞えました。いよ〳〵ひなが産まれるのです。」

卵のからを破ってひなが首を出す。

ひなの羽も見えてくる。

ひょろひょろとひながころげ出す。

親ちどりが來て卵のからをくわえて去る。

（F・O）

（F・I）

堤防を少年たちが降りて來る。

そして、草の上にすわりとむ。

A「あゝくたびれた。きょうの收穫はなんだったっけなあ。」

C「虫ばっかりだよ。」

B「ぼくは植物ばっかりだ。」

A「植物なんかつまんないよ。やっぱり生きたものがおもしろいや。ちょっとその毒びん見せて。」

C「みんな生きてるよ。」

A「ほんとだ。もう毒がなくなったのかな。」

C「あのせみ、苦しがってもがいてらあ。」

Aはせみを投げるようにびんに入れながら、

A「ぼくはもう昆虫に飽きちゃった。どうしても鳥がほしいなあ。卵でもいいや。」

C「ぼくだってほしいよ。」

B「ぼくだってほしいよ。」

A「とにかくぼくはへやの中を標本でいっぱいにしてしまう考えだ。」

C「きみはもうずいぶん持ってるじゃないか。まだほしいのか。」

A「まだ〳〵あんなことじゃぼくは満足できないよ。」

B「そんなに集めてどうするの。」

A「生物学者になるのさ。」

D「学者って欲ばりだなあ。」

AはDをにらみつけて、

A「ちびのくせになまいきだぞ。」

Dはすました顔で遠くを見る。

D「あっ、あの子また來てるよ。」

河原の遠くを何か捜すように歩いているとも子。

B「あの子、毎日いるね。」

C「何してるのかしら。」

D「あの子も学者になるのだね。」
A「どうもあやしいなあ。」
と深くつぶやく。
とも子はきのうかえったちどりのひなを捜しているのだった。
はたして石の陰からちどりのひなが駆けだす。
とも子の追いかける足。まるでねずみのようだ。ひなが駆けて行くあとから、とも子が息をきらして追いかける。
ひなは小石の中に來ると、すわりこんでまるで石のように動かなくなった。
それでやっととも子が追い着いた。
とも子「あゝ疲れちゃったわ。やたらに逃げるんだもの。あたし疲れちゃったわ。こんな所にいたの。」
石の中でじっと動かないちどりのひな。
とも子「まあ、のんきね。ぼうやは日なたぼっこして居眠りしてるじゃないの。」
とも子はひなを手に取り上げ、まるで赤ん坊に言うように、
とも子「あんたずいぶんやんちゃねえ。もう逃げられないようにしちゃうわよ。——さあ狭いけどしばらくがまんしてらっしゃい。」
とも子はひなを石囲いの中に入れる。
とも子「おとなしくしていらっしゃい。きれいなものをつけてあげるからねえ。」
赤いリボンをひなの首につけてやる。
とも子「きれいなリボンよ。かわいくなるわよ。ほうら、かわいくなったでしょう。」
夢中になっているとも子の背後に人のけはいがした。
とも子、はっとしてふり向くと、Aがひとり立っている。
Aはとも子のそばに寄って來て、
A「そのちどりのひな、おくれよ。」
とも子「どうするの。」
A「標本にするのさ。」

とも子「標本って殺すんでしょう。」
A「アルコールにつけるのさ。」
とも子「まあ、アルコール。」
A「どうしてもほしいんだよ。ねえ頼むからおくれよ。」
とも子「あんたなんでもたくさん持ってるってじゃないの。」
A「いやちどりがないんだよ。だからおくれって言うんだよ。」
とも子「いやよ。お願いだからこの鳥取らないでよ。だってかわいそうでしょう。こないだ産まれたばっかりよ。」
A「じゃあきみはこのひな、どうするつもりだい。」
とも子「あたしはもうじきに逃がしてやるつもりよ。」
A「そんなのもったいないや。なんかと取っ換えようよ。取っ換えないか。」
とも子「なんにもいらないわ。」
A「そんならむりに持って行くよ。おくれよ。」
Aはのしかゝるような勢いで迫る。そのときびいびいという鳴き声が聞えた。
ふたりがはっとしてそっちを見ると、親ちどりがばた〳〵と、ちょうど傷ついたようなかっこうをする。
Aはしめたと思って、網を取って立ち上がる。ちどりは、ばた〳〵しながらだん〳〵遠くへ逃げて行く。
Aはどこまでもそれを追って行く。
とも子は見送り、そっと手のひなを放す。赤いリボンをつけたひながちょろちょろと逃げる。
Aの姿は河原の遠くへ消えてゆく。

（F・O）

10 洪水（こうすい）

黒い雲が流れてゆく。
雨雲の中を飛んで行く鳥の群れ。
うずを巻く激流。

河原はほとんど砂州も見えない。
ちどり、あわたゞしく飛ぶ。
砂州をうろ〳〵する残ったちどり二、三羽。
とも子、がっかりした顔で水面を見つめている。
橋の上で少年たちが話しあっている。

C「川の水はずいぶん引いちゃったね。」
A「さっきはずいぶんひどかったからなあ。」
C「河原がちっとも見えなかったね。」
A「河原のものはなんでもすっかり流されちゃってるよ。」
B「ちどりの卵もかい。」
A「それはそうさ。」
C「ちどりのひよこなんかどうしてるだろうな。」
A「みんな流されてるよ。ちどりだってなんだって。」
D「ちどりは流れないよ。」
A「どうして。」
D「羽があるもの。」
A「はゝは、そうか。」……
A「おい内田。川口へ行ってみないか。うなぎが釣れるぞ。」
C「うん、行くよ。」
B「ぼくはうちへ行ってすくうもの持って来らあ。」
A「じゃあみんなすくうもの持って川口へ来いよ。」

11 川口

セルロイドのきんぎょが流れて行く。草や小枝が流れて行く。
げたが流れて行く。
濁流注ぐ川口。
川口の流れで少年たちは網をすくう。ごみのひとかたまりが流れて来る。ふとAがそれを見ると、にこりとほゝえむ。そして他の友にこっそりと、何か拾い取って帽子の中に入れてそこを去る。

O・L 次の画面が前の画面に重なってくること。

（O・L）

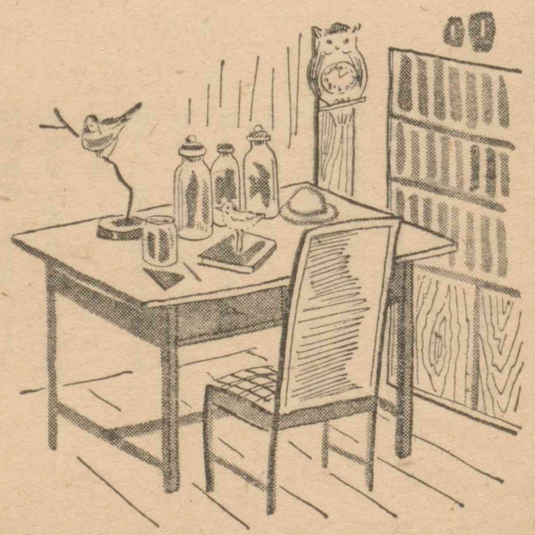
12 堤防

少年は堤防を歩いて来る。
とも子、反対の方から来て出会う。
とも子、不審そうに少年の顔を見る。
少年はにや〳〵と得意そうだ。
すると少年の帽子の中で何かびく〳〵動く。
とも子、ます〳〵不審そうに見る。
少年は去る。とも子見送る。

（F・I）

13 孤児のひな

A少年のへや。
ガラスびんに、アルコールづけの標本やさかなや昆虫がある。
机の上にAの白い帽子が置いてある。
それがする〳〵と動きだした。
中でぴい〳〵と声がする。



これがちどりのひなの捕らわれの姿だ。
壁のふくろう時計がぽっぽっぽっと三時をならして目玉をぐる〳〵振る。
ひなは力をしぼって帽子の中から抜け出す。
ひなは標本びんの胴を駆けめぐる。
びんの中にぱったがもがいている。

他のびんにはなまずが泳いでいる。
壁には不氣味な影が映っている。
剝製の鳥獸の骸骨がにらみつけてるようだ。
ちどりのひなは床に飛び降りる。
ドアのすきまから廊下に抜け出る。
黒ねこが目を光らしている。
ひなはかろうじて外に抜け出した。
月がぼんやり光っていてふくろうの声がする。
草むらの中を走る。かえるが鳴く。
あぜ道を過ぎる。
ひなはしぜんに河原の方へ行く。
河原は夜明けだ。
土手を駆け降りる。
山に朝日が輝きはじめた。
ちどりのひなは砂地を駆け上がる。
河原に出た。
後の方から人影が追って來た。
ちどりのひなはいつものように、小石の中にうずくまった。

手が伸びた。——それはとも子の手だった。

（合唱）

会えてうれしい　ちどりの坊や、
河原朝風　きら〳〵と。
光るさゞなみ　こがね波。
お行き
ゆうべはかあさんちどり、
おまえ捜して鳴いていた。
さよなら　さよなら
また会おう。

とも子は川を渡って中州へ行った。
そしてひなを放してやる。
ひなはいっさんに砂地を駆けて行く。
——母ちどりのもとへ……
とも子はいつまでも見送っている。

字幕

ちどり　終り

（東宝教育映画台本「ちどり」による）

【学習の手引】

(1)この文を読み、前に学んだ「幸福の園」と比べてみて、シナリオの書き方と、劇の脚本の書き方との違いを考えて話しあう。
(2)このシナリオのすじを短いことばで言ってみる。
(3)このシナリオの中心になる点は、どんなことかを話しあう。
(4)身辺のことに取材して、シナリオを書いてみる。
(5)できたら、幻燈に写し、または映画化する。

現代かなづかいの要領

・ゴシックは特に注意すべき点を示す。
・かっこ内の漢字には当用漢字表以外のものも使ってある。

「現代かなづかい」まえがき

一、このかなづかいは、だいたい、現代語音に基づいて、現代語をかなで書き表わす場合の準則を示したものである。

一、このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。

一、原文のかなづかいによる必要のあるものまたはこれを変更しがたいものは除く。

原則

第一類

1. 旧かなづかいの ゐ、ゑ、をは、今後、い、え、おと書く。

例 あい（藍） いる（居る） すいどう（水道） こえ（声） うえる（植ゑる） こうえん（公園） とお（十） あおい（青い） おんど（温度）

2. 旧かなづかいの くわ、ぐわは、今後 か、がと書く。

例 かがく（科学） かし（菓子） ゆかい（愉快） がいこく（外國） いちがつ（一月）

3. 旧かなづかいの ぢ、づは、今後、じ、ずと書く。

例 ふじ（藤） はじる（恥ぢる） じ（痔） じしん（地震） じょせい（女性） みず（水） ゆずる（譲る） まず（先づ） ずつ（宛） なかんずく（就中） さかずき（杯） きずく（築く） だいず（大豆） ずが（図画）

たゞし、（イ）二語の連合によって生じたぢ、づ、（ロ）同音の連呼によって生じたぢ、づは、もとのまゝとする。

▼（イ）はなぢ（鼻血） もらいぢち（もらひ乳） ひぢりめん（緋縮緬） ちかぢか（近々） いれぢえ（入知恵） ちゃのみぢゃわん（茶飲茶碗） みそづけ（味噌漬） みかづき（三日月） ひきづな（引綱） つねづね（常々）

——ぢから（力） ——ぢょうちん（提灯）

——ぢょうし（調子）

——づえ（杖） ——づか（塚・束・柄）

——づかい（使） ——づかえ（仕） ——づかみ（摑み） ——づかれ（疲れ） ——づき（付・搗） ——づく（付く） ——づくえ（机） ——づくり（作・造） ——づくし（盡し） ——づけ（付） ——づた（蔦） ——づたい（傳い） ——づち（槌） づつ（筒） ——づて（傳手） ——づつみ（包） ——づつみ（鼓） ——づとめ（勤） ——づま（妻・褄） ——づまる（詰まる） ——づみ（積） ——づめ（爪・詰） ——づよい（強い） ——づら（面） ——（づらい（辛い） ——づり（釣） ——づる（鶴・弦・蔓） ——づれ（連）

▼（ロ）ちぢむ（縮む） ちぢらす（縮らす） つゞみ（鼓） つゞら（葛籠） つゞく（続く） つゞる（綴る）

4. ワ、イ、ウ、エ、オに発音される旧かなづかいの は、ひ、ふ、へ、ほは、今後、

わ、い、う、え、おと書く。

例　かわ（川）　あらわない（洗はない）　すなわち（則ち）　たい（鯛）　おもいます（思ひます）　ついに（遂に）　いう（言ふ）　あやうい（危い）　まえ（前）　すくえ（救へ）　さえ（さへ）　かお（顔）　なお（尙・猶）　こおり（氷）　とおる（通る）　おおい（多い）　おおきい（大きい）　とおい（遠い）　おおう（覆ふ）　おおかみ（狼）　とどこおる（滯る）　おおむね（概ね）

たゞし、助詞「は」「へ」は、もとのままに書くことを本則とする。

▼わたくしは　では　には　とは　のは　からは　よりは　のでは　こそは　までは　ばかりは　だけは　ほどは　ぐらいは　などは　あるいは　もしくは　おそらくは　ねがわくは　おしむらくは　または　さては　いずれは　ついては

▼京都へ帰る　……さんへ

5. オに発音される　ふは、今後、おと書く

例　あおい（葵）　あおぐ（仰ぐ）　あおる（煽る）　たおす（倒す）

第二類

1. ユの長音は、ゆうと書く。

例　ゆうがた（夕方）　ゆうじん（友人）　りゆう（理由）

〔備考〕「言ふ」は「いう」と書き、「ゆう」とは書かない。

2. エ列の長音は、エ列のかなに えをつけて書く。

例　ええ（應答の語）　ねえさん（姉さん）

3. オ列の長音は、「おう」「こう」「そう」「とう」のように、オ列のかなに うをつけて書く。

例　おうじ（王子）　おうぎ（扇）　おうみ（近江）　かおう（買はう）　こうべ（神戸）　こう（斯う）　なごう（長う）　いちごう（一合）　はなそう（話さう）　そう（然う）　そうろう（候ふ）　ぞうきん（雑巾）　とうげ（峠）　たとう（立たう）　とう（塔）　きのう（昨日）　ほうき（箒）　ほうび（褒美）　りっぱう（立法）　あそぼう（遊ばう）　もうす（申す）　ようやく（漸く）　たいよう（太陽）　かえろう（帰らう）　ろうそく（蠟燭）

〔備考〕「多い」「大きい」「氷る」「通る」「遠い」などは「おおい」「おおきい」「こおる」「とおる」「とおい」と書き、「おうい」「おうきい」「こうる」「とうる」「とうい」とは書かない。

第三類

ウ列拗音の長音は、「きゅう」「しゅう」「ちゅう」「にゅう」のようにウ列拗音のかなに うをつけて書く。

例　おおきゅう（大きう）　きゅうよ（給與）　あたらしゅう（新しう）　きゅうり（胡瓜）　きゅうしゅう（九州）　じゅう（十）　うちゅう（宇宙）　にゅうがく（入学）　ひゅうが（日向）　ぢゅう（誤謬）　りゅうこう（流行）

第四類

オ列拗音の長音は、「きょう」「しょう」「ぢょう」「にょう」のように、オ列拗音のかなに、うをつけて書くことを本則とする。

例　とうきょう（東京）　きょう（今日）　こんぎょう（今曉）　しょうねん（少年）　まいりましょう（参りませう）

よいでしょう（よいでせう）　じょうず（上手）　ちょう（蝶）　にょう（尿）　ひょう（豹）　びょう（鋲）　みょうにち（明日）　みょうじ（苗字）　りょうり（料理）　りょう（猟）

〔注意〕

1　「クヮ・カ」「グヮ・ガ」および「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」を言い分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。

2　拗音を表わす　ゃ、ゅ、ょは、なるべく右下に小さく書く。

3　促音を表わす　つは、なるべく右下に小さく書く。

Approved by Ministry of Education

(Date Oct. 13, 1950)

教育文化研究会

会長　國立國会図書館館長　金森徳次郎

主幹　東京教育大学教授　石山脩平

國語科編集委員

東京教育大学附属中学校教諭　長谷川敏正

東京都立白鷗高等学校教諭　渡辺茂

成蹊大学教授　飛田隆

山梨大学教授　鳥山榛名

東京教育大学附属高等学校教諭　和田邦五郎

同　宮崎健三

お茶の水女子大学附属高等学校教諭　稲村テイ

東京都目黒区立第八中学校教諭　大村浜

一、出版権設定登録済
二、意匠登録出願中
三、無断轉載を禁ず

昭和二十四年一月二十五日　発行
昭和二十六年六月一日　三版印刷
昭和二十六年六月五日　三版発行

「國語」中学二年（三）
定價　金二十八円

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育文化研究会
著作者　代表者　金森徳次郎

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社
発行者　代表者　小松謙助

東京都新宿区市谷加賀町一ノ一二番地
大日本印刷株式会社
印刷者　代表者　佐久間長吉郎

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
発行所　教育図書株式会社

教科書番号　中國 810　昭和 26 年度用

広島大学図書
0130449693